非常の階段

作：広田淳一

【前提】

◎戯曲世界の設定

■　現代日本。

◎想定している装置

■　家庭の食卓。
■　スピーカ。

◎表記について

☆　――同じ数字の☆印を、同時に言う。
★　――前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる「食い気味」。
／　――台詞の調子・方向性を切り替える。あるいは後続の台詞に断ち切られる。
▲　――そでにはけながら言う。
▽　――言いながら登場する。
……　――時間的な「間」、または意味的な断絶を示す。
・　――間を取らない読点。単に判読しやすくするための記号。
■　ト書きの「間」と「一拍」は、「一拍」の方が短い。
■　（このような）括弧内の文字は発音されない。
■　「このような」傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発音するとは限らない。

◎編集中記号について

■　※　――がついた後のト書きは戯曲上の文言ではなく、演出家のメモ。

【登場人物／配役】

大庭八平　……大庭家の父。不動産管理会社に勤務
大庭千鶴　……大庭家の長女。介護福祉士
大庭サカエ　……大庭家の次女。ライブハウスの店長代行
大庭乙音　……大庭家の三女。美大生

大庭ナイト（木下直人）　……八平の甥。詐欺結社の一員

ケン　……詐欺結社の一員。独立後のリーダー格（番頭）。ナイトの友人
ダーさん（橋下大樹）　……詐欺結社の一員。ナイトの後輩
元木　……詐欺結社の一員。ナイトの後輩
フジ　……詐欺業界の一員。ナイトの友人
小柳かづき　……詐欺結社の一員。ナイトの後輩。元・援助交際デリバリーのチーフ職
ヤッチン　……ケンの旧友。裏モノの道具屋。在日中国人二世

大谷　……詐欺業界の古株。現在は詐欺結社の運営と共に幅広く事業を展開
大泉まな　……大谷が番頭を務める詐欺結社の一員。彼の恋人の一人。ダーさんの彼女

甘粕　……国家公務員。犯罪分析による社会の制度設計を担う部署に勤める
戸田ゆう　……国家公務員。甘粕の部下

騙され母　……詐欺被害者

【0】　エピグラム

不良とは、優しさの事ではないかしら。

太宰治『斜陽』より

【1】　おもいで

【夕暮　I】

◎【赤いアジサイ　その1　産卵】　上演日、上演時刻／直接

開場

舞台上、無人。
簡素な客入れ照明。客入れ音楽もシンプルに。あるいは無し。

開演

最初の俳優が舞台上に登場。無音。
※「最初の女」は、千鶴を演じる俳優が担当する。
女、一人で舞台中央まで歩き、そこに立ち、舞台後方を向いて、話し始める。

最初の女　あー、写真では見たことあるんですけどね、実物はちょっと。――ああ、あったのかもしれないんですけど、んー、いや、生では見たことないないですね、カエルの卵。

一拍。

※照明：客電out始め。

最初の女　田んぼなんてありませんからね。水辺とか、土とか、少ないとこですからね。いや、ありますよ。そりゃ、ありますけどね、比較的。少なめなとこかなあ、っていう？　私の住んでるこのあたり――Tokyo。

■音響：効果音。ジングル。「ポーン」

続いてさらに二人の男が登場。最初の女はそれを見て客席方向に向き直る。
※一人目の男はのちに「ナイト」を演じ、二人目の男は「大谷」を演じる。

最初の女　でも好きですよ。カエルは嫌いだけど、カエルの卵は好きです。透明だから。そう、透明なものが好きなんですよ。透明なものはいつでも、光のやわらかさを少しだけ変えてくれます。透明なものはすべて――なんていうかこう、スケスケ。

一人目の男　はい？

一人目の男、最初の女を見る。最初の女は見ない。

最初の女　もちろん写真でなら見たことあります。薄暗い沿道の脇にこう、赤いアジサイが咲いていて、そのすぐ下を流れる用水路の中にウニョウニョーっていう塊が。だから私、赤いアジサイを見るといつでも、カエルの卵を思い出しちゃうんです。

一人目の男　★あるんですか、そんなもの？

二人目の男と最初の女、一人目の男を見る。一人目の男は見ない。

一人目の男　「赤いアジサイ」？

最初の女　あるよ。見たんだもん。あたし。

一人目の男　（真似して）★「あるよ。見たんだもん。あたし」

最初の女　――それはあなたがものを知らないってだけなんじゃないですか？

一人目の男　（真似して）★「それはあなたがものを知らないってだけなんじゃ／」

最初の女　★やめてください。――下半身を不能にしますよ。

一人目の男　（驚いて）どうやって？

最初の女　え、普通に（身振りをして）こうやって、チョキン。

一人目の男　★やめてください。

一拍。

一人目の男　でも、見たことないですよ、赤いアジサイなんて。

二人目の男　（真似して）★「あるよ。見たんだもん。あたし」

一拍。

最初の女　（二人目の男に）なんですか？

一人目の男　（二人目の男に）見たことないですよね？　そんなの。

二人目の男　いや、あるよ。俺も見たことあるし。赤いアジサイ。

最初の女　ホラァ！

二人目の男　そりゃねえ。青いバラだって作っちゃうような時代なんだから、赤いアジサイぐらいあるに決まってんでしょ。あなたちょっと、バカなんじゃないですか？　もしくはちょっと――バカなんじゃないですか？

一人目の男　なんだテメエ／なんだテメエこの野郎？

二人目の男　ところで、夏の夕暮れで俺が思い出すことと言えば、

一人目の男　★聞いてねえよ！

最初の女　いや――ありませんよ。

一拍。

最初の女　青いバラはありません。
二人目の男　や、それができたんですよ。最新のバイオ・テクノロジーを使ってそういう／
最初の女　青いバラは作れません。有名な話です。

一拍。

二人目の男　じゃ、そういうことで。
一人目の男　なんでだよ！
二人目の男　やっぱ夏と言えはあれだよね、花火。
一人目の男　聞いてねえっていってんだろ。
二人目の男　★あれはちょうど、高校あがるぐらいの頃だったと思うんですけど、友だちとみんなで花火をやったんです。っていっても俺は高校は行ってないんでアレですけど、ま、そんぐらいの歳のころに？　みんなで金出し合ってありったけの花火買って、それも線香花火みたいな地味なやつは一切買わないで、ロケット花火とか爆竹とか？　あとたまになんか、灰色のうんこみたいのがニョロニョロ出てくる変な丸っこいやつとか、そういうのばっか買って——。近所のあの、ちょっとデカめの公園でやってたんですけどね、もうそこらじゅう灰色のうんこだらけにして。それはでもすぐに終わっちゃったんで、今度はロケット花火に入りまして。すげえ大量に買い込んでたんでそれ使って［戦争ごっこ］を始めたんです。——やりませんでした？　［戦争ごっこ］。ロケット花火をこう、手に持って。そんで火ィつけて、（投げる動作）オラァ！　つって敵に投げつける。も・ハンパなくうまいやつとかいて。絶妙なんですよタイミングが。ちょうどこっちに当たるぐらいの時に爆発して「アチ！　アチ！」とか言って。そんでやってるうちにだんだん調子乗ってきちゃって、なんか公園にいたよくわかんねえカップルとかにも投げつけたりして。メチャクチャでしたからね、あのころ。最終的には交番に投げ込もうって話になって、もう、襲撃ですよ、襲撃。「オラァ！」とかいって交番に投げて、「パーン！」とか言って。ヤベえヤベえつってみんなでチャリ乗って逃げて。いやァ、よく捕まんなかったなあと思うんですけどね、今となっては。
一人目の男　ちょ待てよ、それ俺の話じゃねえか。
最初の女　え？　そう、なんですか？
一人目の男　はい。全部俺の——なァ、お前の話じゃないよな？

間。

二人目の男　——ま、俺の記憶に残ってんだからある意味、俺の思い出なんじゃないの？
一人目の男　★ちげーだろ。お前は実際やってねえんだから。
二人目の男　そうだったっけ？
最初の女　呆れましたね。
二人目の男　じゃあ、君は実際にやったわけ？
一人目の男　やったよ。

二人目の男、黙る。

一人目の男　なんだよ。自分の思い出みたくして語ってんじゃねえよ。――（観客に）じゃあ、あの、続きは俺が話します／つうほどの話でもないんですけど（笑）　えーと、その［戦争ごっこ］やった日は、もう暗くなるころには全部花火使い切っちゃって。そんでもう金ねーしってことで切り上げて、［儀式］をやろうって話になったんです。あれです。夏の夜と言えば定番の、ちょっと怖い感じの遊びです。

フジ　★ナイト！

一人目の男　え？　ああ――。

と、舞台上少し離れた場所に登場している男・フジが一人目の男に声をかける。
少し遅れてヤッチンも登場。

一人目の男／ナイト　「ナイト」と呼ばれたから俺がナイトです。内藤じゃなくてナイト。ミッド・ナイトとかキャンドル・ナイトとかナイト・ライダーとかのナイト。

フジ　来いよナイト。

ナイト　「只今のお時間、三時間以上のご利用ですとナイト・パックのほうがお安くなっておりますけど」とかの／

ヤッチン　★早くしてくださいよ。

ナイト　ああ、ごめんごめん。（客席に）まずはあの、八年ほど前のお話から――。

◆音響：曲in「思い出」。

◎【儀式　その１】　回想　十八年　八月二十五日

公園。
男たち（ダーさん、フジ、元木、ケン、ヤッチン）が登場。
そこに先ほどのシーンの「一人目の男」が「ナイト」として合流。

◇音響：曲out「思い出」

ダーさん　ちょ、絶対ウソだし。俺、全然信じねーからそういうの。

元木　いいじゃんいいじゃん、なんか楽しそうだろ。

ダーさん　お守りとかも全然信じねえし、てかむしろ俺、火ィつけるし。

元木　はあ？

ナイト　火ってなんだよ？

ダーさん　てかあれだよ、俺、手相でなんかこの線が短いとか言われたから、ナイフでバア切って、思っきし違う手相とかにしてやったことあるし。

元木　へえ。
ナイト　血だらけじゃねえか。
ケン　ま、いーから、いーから。そんじゃ、はい。今から［儀式］を始めまーす。
全員　うぇーい。
ケン　はい、まず、みんなで丸くなって手ェつなぐ。
ナイト　（小声で）――「うぇーい」ってこたねえだろ。

全員、立ったままで円を作り、手をつなぐ。ダーさんの両隣はナイトとフジになる。

ケン　ハイハイ。そしたらこっからは絶対しゃべんないで聞いてほしいんだけど、――今から、一人づつ、大切な人が死んだ時の話をしていきます。
元木　えー。
ヤッチン　え、それはどういう人でもいいんすか？
ケン　★しゃべんなっってんだろ。
ヤッチン　あ、すんません。
元木　そっかそっか。
フジ　なんか手汗すげえんだけど、ダーさん。
ナイト　フジもいったん（黙ろうぜ）。

一拍。

ケン　ま、誰でもいいんだけど、自分にとって本当にお別れしたくなかった人？　出来ればもう一回だけでも会いたいな、とかそういう人の話をしてくのね。で、順番に一人づつ話してって全員やって、こう、一周したら儀式は成立ね。そんで、「せーの」っったらみんなで一斉に目ェ開けるから。そしたらほんの一瞬だけどその、みんなが話してくれた大切な人が見えるから。
ナイト　マジでか。
元木　うえー。
ケン　黄泉がえりっていうか、一瞬だけ戻ってきてくれるから。
ダーさん　嘘くせえし。なんすかそれ。
ナイト　★なんか手汗すげえんだけど、ダーさん。
ダーさん　★体質っす。
ケン　で、ちょっとこれはホント注意して欲しいんだけど、儀式の途中で目ェ開けないこと。あと、絶対に途中で手ェ放さないで。途中で離れちゃったらヤバいことになっから。
ダーさん　え、ヤバいってなんすか？
ケン　呪いっつうか、死んでる人の側に呼ばれちゃって。だからこれはホント、絶対に注意っていうことで。
ナイト　うーい。
ケン　そんじゃ始めっか――ああ、みんな一回深呼吸しよっか？

全員で深呼吸。

ヤッチン　なんか、緊張しますね。
元木　★ＡＶみてえ。
フジ　どこがだよ。
ケン　ハイ。みんな、目ェ閉じて。じゃあ、ヤッチンから。
ヤッチン　はい。あー、俺が小学校の時にクラスで一番仲良かったやつがいたんすけど、「ヨッシー」って呼ばれてたんですど、なんかいっつもニコニコしてて。だけどヨッシーはすっげえ頭キレる奴っていうか、クラスのみんなから一目置かれてる感じで。でなんか、ヨッシーが春休みの最中、終わる頃ぐらいに事故で死んじゃって――。
ダーさん　ちょっ、ヤバい、手が、ちょっ、待って！
ケン　放すなよ！
ダーさん　や、でも、ヤバい、ちょっと待っ、あ、あ、ああっ！　ヤ、ヤバい、ヤバい離れた。離れた！
ケン　中止！　みんな目え開けて。

ケンが急いでみんなの手を切り離して回る。儀式らしい作法に則っている。
ダーさんの隣にいたナイトが死んだように倒れている。

ケン　（ダーさんに）てめ放すなって言っただろ。
ダーさん　や、でも――／
フジ　★ふざけんなよ。
ダーさん　や、すっげえ力で引っ張っから――ええ？
フジ　やっべえぞ、マジでコレ。
元木　え、どうすんのどうすんの？
ケン　（ナイトに）おい、大丈夫？　☆ちょっ、しっかりして？　平気？
フジ　☆え、大丈夫でしょ？　大丈夫だよね？
ダーさん　★いや、ヤバいヤバい、これ、ヤバいっすよこの感じ。ちょっ、これ呼んだ方がいいっすよ。呼んだ方がよくないすか、これ？
フジ　あ、何をだよ？
ダーさん　や・だから、きゅ、救急車。救急車。救急車。
ヤッチン　無理だろ、タバコとか酒とかバレんだろうが。
ダーさん　★そんなこと言ってる場合じゃねーべ！
フジ　★おめえが放すから悪いんだろうが！
ダーさん　ちょっ、そうすけど、いや、でも呼んだ方がいいですって。しっかりしてくださいよ、ナイト先輩！　しっかり――ああ、誰か水ちょうだい！　ちょっ、しっかりしてくださいって、

先輩！　ナイト先輩、行っちゃダメっすよ！　――冷たくなってる。先輩、行くな！　行くなーッ！　行くなーッ！　ワーッ！

と、急に倒れていたナイトが何事も無かったように立ち上がる。スタスタと歩き、

ナイト　あ、今日ってジャック・ニコルソンの誕生日らしいっすよ。

ダーさん以外の全員、爆笑。

フジ　知らねーよ。
ケン　何の話だよ。
ダーさん　ええ？　あ、なに？　ええ？　あ、え――？
フジ　マジウケんだけどこいつ。
元木　（真似して）★「冷たくなってる」！
ケン　ねーわ、これわ。ねーよ。
元木　★ダーさーん。
ヤッチン　お前、かかり過ぎだろ（笑）
ナイト　でもでも、ひとつわかったことあんだけど、こいつはマジでいいやつ。
ケン　間違いない。
元木　★間違いない。
フジ　え、ねえねえ、ダーさん、こういうの信じないんじゃなかったの？
ヤッチン　どうなのそのあたり？
ダーさん　ちょマジ――。なんすかあ。こーゆーの反則・反則だろーがよー。
全員　はい、だーいせーこーっ！

◆音響：曲in「曖昧な記憶」。

ナイト以外、退場。

舞台上には最初の女と二人目の男がいて、右の様子をどこかで見ている。

◎【赤いアジサイ　その2　記憶】　上演日、上演時刻／直接

ナイト　とか、そんなことをやった記憶があります。これは確かに、俺の思い出です。
二人目の男　そうだったっけ？
ナイト　確か、そうだったような気がします。
二人目の男　じゃあ、君は実際にやったわけ？　間違いない？
ナイト　――だと、思います。
二人目の男　なんだよ、君の話じゃなかったの？
最初の女／千鶴　呆れましたね。

ナイト　姉ちゃん！

千鶴　姉ちゃん、と呼ばれたから私が彼の「姉ちゃん」です。

千鶴、舞台上を歩きだす。

ナイト　俺は、自分のことよりも友だちがやっていたことの方をよく覚えているような気がします。友だちのことは、本当に大切にしたいと思ってきたからよく見ていたんです。見ていた、つもりになっていただけかもしれませんが――。

場面転換。

◇音響：曲out「曖昧な記憶」。

【解読　Ⅰ】

◎【設計　その1】　二十六年　十一月十四日

職場における甘粕の部屋。
甘粕、ダーさん、戸田がいる。甘粕が上役らしい場所におり、戸田は立っている。
ダーさんは客人として甘粕の正面に位置している。

甘粕　で、あなたがその「ダーさん」なわけですよね？　橋下、大樹さん。
ダーさん　あ、はい。
甘粕　頂いた資料、目を通させてもらいました。まあ、こちらも最終報告をまとめる段階なんでもう一回面接っていう時期でもないんですけど――／
戸田　★あの、私が、強くお願いをいたしまして。本当に今日も彼は来たくないってことだったんですけど、そこをなんとか、ということで、
甘粕　（ダーさんに）★これあなたご自身で書いたってわけじゃないんですよね？　権利関係であとで揉めたりしません？
戸田　はい。そういうことは絶対にありません。
甘粕　いや、彼に聞いてるんだから。
戸田　はい。

一拍。

ダーさん　まあ、揉めるとかは無いと思いますよ。
甘粕　でも重要な資料だからたっぷりお金でますよーってなったら、ねえ？
ダーさん　もう死んでますから。
甘粕　あ、え――？　亡くなってるの、この――ナイトさん？
ダーさん　はい。
甘粕　それじゃ遺稿ということね。んー、親族絡んでくるとまたややこしいこともあると思うんだけど。
ダーさん　親族です。
甘粕　ん、あなたが？
ダーさん　はい。あの人の家族は俺たちですんで。
甘粕　あー、ご兄弟とかってことでいいんですかね？
ダーさん　まあ、そんなようなものです。

一拍。

甘粕　橋本さん、これぶっちゃけた話、どれぐらいフィクション入ってます？

戸田　★いや、全部実際にあったことだそうです。私もかなり信憑性は高いと思います。
甘粕　うん、「思います」なわけでしょ、だから、
戸田　はい。でも、研究対象にする価値は十分あるんじゃないかあ、と。最悪、今回の報告に盛り込めなくってもそれはそれなんですけど――／
甘粕　★そうもいかないでしょ。税金使って動いてんだからこっちは。
戸田　でも貴重な記録ですから、見聞記ってのはやっぱり時代の証言だと思うんですよ。
甘粕　ま、わかるんだけどさ、
ダーさん　あの、
甘粕　――はい。
ダーさん　ちょっと、トイレ行ってきていいすか？
甘粕　ええ、もちろん。

ダーさん、立ち上がる。戸田、それを案内し、

戸田　出てすぐ右にございますんで。
ダーさん　ああ、はい。

ダーさん、軽く会釈して退場。
甘粕、改めて資料を手に取っている。

甘粕　戸田さんは、入所して何年だったっけ？
戸田　三年です。
甘粕　じゃあ、そろそろ新人が辞める時期だねえ。

一拍。

戸田　へえ、そうなんですか？
甘粕　一般論としてね。ホラ、うちの部署は直接・当事者と関わるからさ、ここ来て自分の立場がしんどくなっちゃう人は多いのよ。そう、戸田さん、うちらの立場ってなに？
戸田　立場は、えーとだから関係者への聞き取り調査をベースにして、社会のアーキテクチャ、制度設計を可視化していくこと――。
甘粕　わかってんじゃない。
戸田　一応、そう教わってます。
甘粕　事件の裏側の、いちばん根っこのとこを分析して、そういった犯罪を減らしていくために根本原因を探っていく、
戸田　だからあくまで彼も表面的な、――分析のための素材に過ぎないってことですよね？　あんまり肩入れするなっていうか、
甘粕　わかってんじゃない。

戸田　はい、ちゃんとわきまえて対応してるつもりです、
甘粕　そんじゃ、ちゃっちゃと終わらせて帰ろうよ。ね？
戸田　はい。あ、甘粕さんこのあと――出張でしたっけ？
甘粕　いやいや、「介護」です。
戸田　ああ――。もうよろしいんですか、お母様？
甘粕　よくはなんないでしょ、老人なんだから。でも、ま、もうしばらくは生きてんじゃないの？
戸田　ああ。
甘粕　呼吸器つけてからしゃべれなくなっちゃって。退屈でしょうがないよ。
戸田　そうですか。
甘粕　って、いいよ別に。興味無いでしょ？
戸田　や、そんなことはないですけど――。
甘粕　うん。ありがとう。

ダーさん、帰ってくる。

戸田　大丈夫ですか、お腹？
ダーさん　はい。めっちゃ下ってます。
戸田　ああ――。
甘粕　それじゃボチボチ始めていきましょうか。彼、えーと、ナイト君？　の手記をベースに適宜こっちから質問をさせていただきますんで。
ダーさん　はい。なんでも、質問してください。

甘粕、書類を読み始める。

甘粕　「何から書いていいのかわかりませんが。まあ、グダグダくだらねえことになるのかもしれませんが、書きます。最後まで読んでもらえたらうれしいです」
ナイト　高校生のころに、

◆音響：曲in「Sのカンパニー」

一拍。

ナイト　っていっても、俺は高校行ってないんでアレですけど、［戦争ごっこ］とか、ああいう遊びをやっていた連中とはそのうち会わなくなりました。みんないろいろと仕事をしてみたり、学校行ってみたり、まともな社会生活が送れるようにがんばってみた時期だったんだと思います。もちろん俺も、まじめに働こうと思ったこともありました。っても法律で許されてるようなことはあんまやってなかったんで、一回、そういう所のお世話にもなっちゃいましたけど――。

一拍。

ナイト　あそこ出る時には随分おじさんに迷惑かけました。うちは母親がトンじゃってたんで、おじさんに身元引受人とかになってもらったりして？　うるさいんすよ、未成年だとそういうの。あれはホント今でも迷惑かけちゃったなって思ってます。それで俺も一応は反省というか、そういう気持ちもあって、だからちゃんと働こうって決心して、それで古い先輩からの紹介もあってS（エス）――詐欺のカンパニーに入れてもらうことになったんです。

場面転換。

◇音響：曲out「Sのカンパニー」

■音響：効果音　電話の発信音。

◎【消息不明】　二十六年　八月十日　朝方

フジ　あ、もしもしダーさん？　やっと繋がったよ／お前いまどこいんの？

一拍。

フジ　もしもし？　大丈夫？　ダーさんどこいんの？　――おい、しっかりしろよ、もしもし？　もしもし？／って話ができたのはそれだけ。

フジ、ケン、ヤッチン、小柳、元木、右のやりとりの間に登場。それぞれ離れた場所にいる。

ヤッチン　え、これ、結構ガチなやつっすよね？
ケン　決まりだな。ダーさんは誰かに捕まってる。
小柳　それ賛成。
元木　なんか言って無かったんすか、ダーさん？
フジ　なんも。電話の向こうでハアハア言ってただけだから。
ナイト　え、どういう状況なの、それ？
フジ　知らねえけど。まあ、誰かがダーさんを縛り上げて、そんであいつの電話でこっちにかけてきたってことなんじゃねえの？
元木　（小柳に）マナちゃんはなにも知らないんだよね？
小柳　知らないみたい。てかまあ、パニクってたよあいつも。
元木　そっかそっか。
ヤッチン　何が狙いなんすかね？
フジ　知らね。
ケン　とりあえずまあ、うちらへの「攻撃」が始まったってことじゃねえの？
元木　――それって、え・俺が狙われるかもしれないってことすか？

小柳　そりゃゼロじゃ無いよね。可能性は。
元木　えー。
フジ　じゃあホントに行く？　ナイトの実家。
ナイト　あー、うちは全然。おじさんにも話通してあるから、うん。
ケン　じゃあ、その方向で。

◆音響:曲in「夕暮れ」

元木　了解っす。
フジ　はいはーい。
小柳　ね、それってさ、あたしも行かなきゃなの？
ケン　そりゃね。
フジ　俺だって別に行きたかないんだし。
小柳　え・でも、なにも人ん家に行かなくてもよくない？　てか入れんのこの人数？
ナイト　うん。そんな広かないけどさ、雑魚寝ぐらいなら。
小柳　マジでかー。
ナイト　とりありず絶対足はつかないわけだしさ、隠れるには最適でしょ。
小柳　そうかもしんないけどさあ――。
ケン　そんじゃ集合は十二時間後、現地で。お前らの居場所も割れてんだろうから金置いて出てくんなよ。各自、安全なところに。

メンバーたち歩きだす。

◎【千鶴語り　その1　斜陽】　間接

千鶴　物語はずっと夕暮れの光の中を進む。朝焼けなのか夕焼けなのかはわからない。ただ太陽はずっと斜めに差し込んでいる。

◇音響曲out「夕暮れ」

【2】　しゅうげき

【初日　I】

◎【合流】　二十六年　八月十日。夕方

ナイトとその友人たち、登場。エレベータから降り、廊下に出てきたところ。

元木　すげえ、高え。ね、これ落ちたら死ぬかな？
小柳　九階は無理っしょ。
フジ　ここ？　あの奥の？
ナイト　ああ、そうですそうです。ここです。
ヤッチン　そんじゃ、失礼しまーす。
ナイト　ちょっとヤッチン！

ヤッチン、玄関のチャイムを連打する。

◆◇音響:効果音　チャイム

ナイト　おめふざけんな殺すぞ。
ヤッチン　（笑）すみませんなんか、テンション上がっちゃって。

千鶴、登場。

千鶴　はーい。
ナイト　ああ、久しぶり、姉ちゃん。
千鶴　うん。早かったねえ。って、あれ？
ナイト　あー、入っちゃって大丈夫かな？
千鶴　まあ、いいけど――。
ナイト　★そんじゃみんな、入って。
フジ　お邪魔しまーす。

友人たち、口々に挨拶をしつつ、家の中に入る。

千鶴　ちょっとちょっと、
乙音　なになに？

乙音、登場。ナイト、それを見つけ、

ナイト　いよう、乙音ちゃん！　ちょっとまたしばらく厄介になっからさ。久しぶりに一緒に？
　楽しくやっちゃおうよ。
乙音　しんどい、しんどい。
ナイト　あれ、サカエちゃんは。
千鶴　いや、まだ仕事だけど――。
元木　（乙音に）あ、自分、元木っていいます。モトちゃんって呼んでやってください。
ヤッチン　あー俺、矢吹です。薬師如来ってみんなには呼ばれてて、
小柳　★誰も呼んでねえし。あ、どうも小柳です。
ケン　おい、そんじゃお前ら荷物かさばらないようにキチッとまとめておけよ。
友人たち　はーい。

　友人たち、荷物を整理しはじめる。

千鶴　ちょっと、ちょっと！

　千鶴、乙音、ナイトを少し離れた場所に連れていき、

千鶴　え・え・どちら様？
ナイト　友だち友だち。
千鶴　なに、みなさん泊るわけ？
ナイト　ま、そういうことになるね。
乙音　★いやいやいや、無理に決まってんでしょそんなの。
ナイト　大丈夫、大丈夫。あ、乙音ちゃんなんか、背えのびた？
乙音　変わってません／なんでこんな大勢で来るんですか？
ナイト　や、まあ、そんなに長くいるわけじゃないからさ。
千鶴　★っていったってあんた、寝る時どうすんのよ？
ナイト　なんか畳の部屋空いてない？
乙音　いや、空けてありますけど――。
千鶴　★こんなに入んないでしょ？
乙音　そうだよ。
ナイト　ま、そしたら残りの連中はリビングにゴローンてしてっからさ。
千鶴　床に？　直接？
ナイト　うん。なんか問題ある？
乙音　いや、布団だってないしさ、
千鶴　みなさんだって、困るでしょう。
ナイト　あ、全然余裕。みんな寝袋もってきてっから。
千鶴　寝袋？
乙音　え・なにしにいらっしゃったんですか、みなさん？

ナイト　だからあれだよ、実家にもしばらく帰ってないなあ、みたいな？　ホラお盆だしさ。
乙音　★いやいやいや、全然、あの人たちハジメマシテなんですけど？
千鶴　それにここ・「従姉妹ん家」でしょ、あんたの？
ナイト　しょうがないでしょ。俺の場合どうしたってこの、叔父さん家が実家ってことになるでしょうがよ。
乙音　ちがくないかそれは――。
千鶴　★わかってんの？　うちはキャンプ場じゃないんだよ？
ナイト　大丈夫だって。まあ、あいつらなりに？　ちゃんと礼儀はわきまえってから。そのあたりはもう安心してよ。
千鶴　できるわけないでしょ。
小柳　★すみませーん、ちょっとあの、シャワーお借りしちゃってもいいっすかあ？
千鶴　え？　ああ――じゃあちょっと今、バスタオル出しますから。
小柳　いや、いいっすいいっす。自分のありますから。
千鶴　ああ、そうですか？　まあ、でもホラ一応。
ヤッチン　ああ、じゃあ俺はお借りしていいっすか？
フジ　俺も俺も。
元木　俺も。

場面転換。時間経過。

◎【千鶴語り　その２　月夜】　間接

千鶴、舞台上の別の場所に行く。
友人たち、ナイトを残して退場。

千鶴　と、これが襲撃初日の出来事です。もう、ホントにね――／
ナイト　いや、襲撃ってことはないでしょ。「合流」。ね、合流って感じで。
千鶴　ナイトが久しぶりに来るっていうんで、うちでも軽く準備なんかをしていたわけなんですけど、私たちのそういった思いは大きく裏切られてしまったんです。その日の、
ナイト　夜。

◎【家族会議　その１　八平帰宅】　二十六年　八月十日。夜

大庭家のリビング。
長女（千鶴）、三女（乙音）がいる。乙音は漫画を読んでいる。
そこへ父（八平）、登場。

八平　ただいまあ、と。

乙音　ちょっと、お父さん！
千鶴　おかえり。
八平　うん。ただいま。
乙音　なんかすっごいいっぱい人来てんだけど。
八平　そうみたいね。玄関がなんか、ね――。
乙音　★どういうことなの？
八平　なにナイト、友だちと一緒に来たの？
千鶴　まあ、そうなんだけど――。なんか大勢で。
八平　あーそう。友だちいっぱいできたんだな――。
千鶴　★いや、そういうことではなく。
乙音　え、帰ってもらおうよ。言ってよ、お父さんから。
千鶴　いきなり大勢で来たもんで、びっくりしちゃってさ。何も聞いてないの？
八平　一応、今日来るってことは聞いてたけど／あ、そう？　友だちと一緒だったか――。
乙音　わけわかんないんだけど。
八平　んー。なんだろなあ。
乙音　★せっかくなに？　家族で過ごす最後のお盆かもしんないのにさあ。
八平　じゃ、あとで俺から聞いとくから。（明るく）それにお前、お盆だってそんな最後ってこと
　はないんだしさ。
乙音　でもこの家にいるのは最後じゃん。
八平　ま、そうだけど――。
乙音　★そうなんじゃんやっぱり。
八平　ハハ。怒っちゃった。
千鶴　こっちはナイト一人で来るもんだと思ってたからさあ。
八平　うんうん。
千鶴　大勢だったし？　女の子とかもいて。
八平　なに、そんで今、部屋にいんの？
千鶴　いるいる。（声をひそめて）すっごい大人しくしてんの。気味悪いぐらい。
八平　なに？　なんか言ったの？
千鶴　いや何も。だけどなんか、着いてからずうっと部屋に篭りっぱなしで。
八平　ふーん、そう？　――じゃあ、ちょっと、話してくるかな。
千鶴　うん。そうしてみて。
小柳　あのー。

　と、そこへフジ、元木、小柳、登場。

千鶴　ああ、どうも。どうかしました？
フジ　あ、いや、洗濯機とかっていうのはあれ、使っちゃっていいもんなんすかね？
千鶴　ああ、洗濯、は、じゃあ――いっしょにやっときますよ、

フジ　あ、え、ホントですか？
千鶴　ええ、分ける意味もないだろうし。
フジ　え、でもそれはなんか――。
小柳　悪いんで。自分らの分はちゃんと――。
千鶴　ああ、そうですか？
小柳　はい。
千鶴　まあ、その方が良かったら別でもいいですけど／あ、まあ、どうぞご自由にお使いくださいって感じで。
小柳　あ、はい。
八平　（フジたちに）★ああ、どうも。ナイトの叔父です。
元木　☆ああ、
フジ　☆お邪魔してます。
八平　ナイトはあれ、部屋にいんの？
フジ　ああ、はい。あと何人かと――。
八平　なんかあのォ、――仲良くしてやってくださいね。
フジ　はい。もちろん。な？
元木　はい。

一拍。

小柳　じゃ、あのそろそろ――。
八平　ああ、どうぞ。お休みなさい。ていうにはまだ早いか、ね？
小柳　（笑）はい。ですかね。
千鶴　そんじゃ、あたしちょっと教えましょうか、使い方？
八平　ん、そうだね。
小柳　あ、どうも。

千鶴、小柳、フジ、元木、退場。．
八平、乙音の前に戻り、

八平　いい人そうじゃない、なんかね。
乙音　――知らない。

◆音響：曲in「テレアポ」

場面転換。

◎【詐欺電話・DV男の女編】　回想

ナイト　今から考えると、俺にとって一番まともな会社で働いたのはSのカンパニーにいた頃だったなって思います。マジでしっかりしてるんですよ。前にテレアポやってるやつと話したことあるんですけど、「ああ、同じだな」って。普通に会社ですよ。稼ぎもスゴかったし。いや、普通ではないか――。すげえ一生懸命働いてる会社です。

■◇音響：効果音　電話、着信音。曲out「テレアポ」

母　はい。三浦です。
浩二　ああ、もしもし母さん？　浩二だけど。
母　ああ、浩ちゃん――。（くだけた調子になって）なあに、どうしたの？　昨日も電話してきたのに。
浩二　昨日は言えなかったことがあったんだ――うん、とりあえず、電話代わるから。
母　え？　うん、誰に？
DV　★ああ、もしもし？　あんたがお母さん、浩二クンとこの？
母　はい――そうですけど。
DV　★俺、加藤ってもんなんだけどね。あんたの息子さんが何してくれたかわかります？　人の女に手え出して、ガキ孕ませやがってねえ。
母　ええっ、浩二が？
DV　おう、結婚してんだろてめえの息子よォ？　いい教育してくれたなあ、あんたも。
母　いや、あの、ちょっと状況がよくわからないんですけど――。
浩二　（再び電話代わって）ああ、もしもし？　浩二です。
母　ああ、浩二？　なにどういうことなの？
浩二　ごめん。母さん。ごめんなさい――（泣く）
母　なに、本当のことなの今の？
浩二　うん、本当なんだ。
母　なにやってんだよ、お前は――。
浩二　ごめん――ごめんなさい――ぐふふ（泣く）
母　それよりなに？　ミオさんにはまだ伝わってないんでしょ？
浩二　うん、ミオにはまだ――。
母　絶対言ったらダメよ。いい？　黙ってなさい？
浩二　やっと夫婦になったのにィ！
母　ええ？　なに？
浩二　夫婦生活というくくりの中ではァ、ごく小さいことだと思うんだあ！
DV　★てめえ「ごく小さい」ってどういうことだ！　ふざけんじゃねえぞ！
浩二　ぐわあ！

浩二が蹴られたらしい物音。

母　ちょっ、浩二？　浩二！

DV　おい、てめえの息子ナメてるなこれは。完全にナメてるわ。あー、頭来たこっちも。もうあれだ、お別れだ。あんた息子さんの顔を見ることはもうねえからな。

母　え？　ど・どうなっちゃうんですか？

DV　★どうもこうもねえだろうが！　てめえ日本で年間何人の行方不明者が出てるか、わかっておられますでしょうか、お母さま？

母　いや、あの、存じ上げませんけど――。

DV　８万人ほどもいるんですよ。

母　ええ、そんなに？

DV　だからよォ、人一人ぐらいどうとでも処理できんだこっちは。そしたら何だ、豊島区目白3-17のなんたら、ここな。あんたの家で間違いないんだろ？

母　ええ、そうですけど――。

DV　そしたらここに浩二さんだった身体の一部を届けてやっからよ。どこでも欲しいとこ言えよ。あ、腕か？　足か？　どこがいいよお母さん？

母　★ちょっと待ってくださいよ、そんな――。

浮気女　（電話代わって）★もしもし？　あの、お母様ですか？

母　ああ、はい。あなたは――？

浮気女　（すでに泣いている）すみません、私がこんなことに巻き込んでしまって。

DV　（電話の後ろで）悲劇のヒロイン気取りか？　色キチガイの分際でよォ！

浮気女　私がその――浩二さんに相談をさせていただいてまして。

母　ええ、ええ。

浮気女　それで浩二さんが、悪い人から助けてくださろうとして――／

DV　★悪い人って誰のことだてめえ？　びっくりすんなホント。てめえの悪いマンコが引き起こした事態だろうがすべて！

浮気女　きゃあ！　やめて！

DV　言い直せてめえ。私の悪いびっくりマンコが引き起こした事態です、申し訳ありませんでしたって、言えよちゃんとお母様に！

浮気女　★言えませんそんな！

DV　言えよホラ！　言えや！

浮気女　わ、私の悪いびっくりマン――びっくり、マン、言えません！

DV　てめえ、やることやっといてなに被害者ぶってんだクソがあ！

浮気女　きゃあ！

ドタン・バタンなどの音。

母　★ちょっちょっと、浩二、浩二を――。

浩二　母さん、母さん？

母　ああ、浩二？　どういうことなのこれ？

浩二　もうダメだー。もうダメなんだ俺はー（笑）

母　しっかりしなさい！
浩二　ダメだあ、あああああ（泣き崩れる）
母　浩二なのね？　本当にあったことなのね？
浩二　ごく小さいことだと思うんだあ！
ＤＶ　★そのしゃべり方やめろっつってんだ、気持ち悪い！
浩二　ぐわあ！
母　★ちょっ・ちょっと！　もしもし？　もしもし？
ＤＶ　（息切れしている）――悪いけどそういうことだからよ。邪魔したな。
母　わかりました！　お金、お金を出しますからあの！
ＤＶ　金なんかもらったってしょうがねえだろうが！　（声のトーンを落とし）なあ、俺の気持ちがわかるか、お母さん？　俺だってなあ――俺だって愛してたんだあいつを！
母　（同情して）ええ、その、びっくりマンコの方をですね？
ＤＶ　★てめえが言ってんじゃねえよ！　なんだその言い草は！
母　（驚いて）す、すみません。ちょっとお名前がわからなくって――／
ＤＶ　★親子でおちょくってやがんだな俺を？　もういい。もうわかった。ここでやってやるよ上等だ。
母　え？　え？

浩二がラジカセのボタンを押す。すると、電動工具が動くような音が流れる。

■音響：効果音。電動工具。

母　払います！　お金だったらいくらでも払いますから！
ＤＶ　乗らねえよその手には！
母　信じてください！　必ず払いますから！
浩二　★ダメだ母さん！　こんなやつに金をやる必要は無い！
ＤＶ　うるせえ黙ってろ！
浮気女　やめてー。
母　今日払います！　もう、今すぐ払いますからあ！
ＤＶ　（トーンを落として）――じゃあてめえ今すぐ一千万用意できんのか？
母　一千万！　てそんな急には――。
ＤＶ　じゃあダメだ。おしまいだァ！
母　待ってください！　待って、五、五百万ぐらいでしたらなんとか――。
ＤＶ　――なんだそれ、半分になってんじゃねえか？
母　すみません。
ＤＶ　五百万だったら払えるんだな？
母　はい。なんとか――。
ＤＶ　ホントだな？
母　ホントです。

ＤＶ　絶対だな？
母　絶対です！
ＤＶ　今日だな？
母　今日です!!
ＤＶ　はいー。信じませーん。言葉ではなんとでも言えまーす。
母　ええ？　じゃあどうすれば――？
ＤＶ　今から担当のものがそちらのご住所まで伺いますんで、そのままお待ちいただけます？
母　え、ええ、担当の方？
ＤＶ　もうお宅のすぐそばまで行ってますんで、一緒に銀行なり何なり行っていただいて。
母　はい。わかりました。
ＤＶ　★あー、警察とか？　別にいつでも連絡していただいて結構ですんで。ああそういう態度なんだな、と。分かり次第、浩二さんの解体作業・始めさせていただきますんで／
母　★いえ、しませんそんなことは！　しません！
ＤＶ　はーい。あとはもう行動で示してくださーい。じゃ・どーぞよろしくー。

電話、切る。

■□音響：効果音。電話切断音。

※ＤＶ男はナイト、浩二は元木、浮気女は小柳が演じていた。

この場にはさらに大谷、ヤッチンがいる。

大谷　――落ちたね。
元木　もらっちゃったかなあ、みたいな？
大泉　いやあ！　めっちゃ扱いやすかったですね、あのお母さん。
元木　★マジウケんだけど。「信じてください！」とかいって絶叫してなかった？
小柳　★かかり過ぎでしょ（笑）
ナイト　でもでも、ひとつわかったことあんだけど、あのお母さんはマジでいいお母さん。
小柳　間違いない。
元木　★間違いない。
全員　はい、だーい、せー、こー！

ひとしきり大喜びの歓声をあげるメンバーたち。

大谷　よーし！　じゃあとはこっちで処理しとくからお前らは次いこう。とにかく数いけ数。つまんねえ客にこだわんなよ！
全員　はい！
大谷　魂（ソウル）込めてけよ！

全員　はいっ！
大谷　ナイト。

◆音響：曲in「トバしの携帯」
大谷、ナイトを少し離れた場所に呼ぶ。

大谷　良かったな。はじめてクローズまでいったんじゃない？
ナイト　はい。クローズは、はじめてです。
大谷　大丈夫だよ。最初苦労したやつはそのあとガンガン行けるから。だってお前、センスあるんだもんなんせ。
ナイト　そ、そうっすかね？
大谷　おう。いっぱい見てきてっからすぐにわかるんだよ、センスあるやつは。おお？　いい顔になってきたじゃねえか。最高だよお前！

大谷、ハグをする。

ナイト　ありがとうございます！　俺、俺、がんばりますっ！

ナイト　めっちゃ見え透いてるんですけどね、今考えると。けどまあ、こういうのも慣れっていうか。そうそう、人に褒められたこととか期待されたことっていうのが全然、なかったんで。

◎【設計　その2】　二十六年　十一月十四日

いつからか舞台上の別の場所に甘粕、ダーさん、戸田が登場している。

◇音響：曲out「トバしの携帯」

甘粕　（ダーさんに）こういう気持ちっていうのは、「ダーさん」にもわかるものなんですか？　褒められ慣れてないっていうか、逆にそういうのが強いモチベーションになったり？
ダーサン　やあ、――こんなのわかんない人には全然わかんないと思うんですけどね、
甘粕　ええ。
ダーさん　めっちゃいいもんですよ、期待されるって。頭がボーッとしちゃうぐらいの、麻薬みたいなもんですよ。
甘粕　麻薬。
ダーさん　だって信じてくれるわけじゃないですか？　電話かける時、こっちはマジで助けて欲しいって思ってるんですよ。「ああ、もう本当にヤバい・母さん助けてよ」ってそういうことを本気で思ってるんです。それで向こうも、どうしても助けてやりたいって。電話の先にいるこの俺を、そんぐらい価値のある人間なんだって思って、期待してくれてるわけですよ。
戸田　それはでも、騙した上での期待でしょ？　本当の期待とは違いますよ。

甘粕　でも、同じなんじゃない？
戸田　どこがですか？
甘粕　騙した上での期待だって、ねえ。受け取ってるのはホンモノの感情なんだから。
戸田　でも――。
ダーさん　そうなんですよね。台本があって、ちゃんとホラ、設定に合わせてＢＧＭとかも流しますし？　お芝居作ってるような感じなんですよ。

◆音響：曲in「トバしの携帯２」

大谷　いいかお前ら。日本の個人資産の七割以上は五十を過ぎたジジイとババアが掴んでる。ふざけた話だ、七割だぞ七割？　「資産五千万の人間から五百万取る」。これが俺たちのやってるビジネスだ。貧乏人ぶっ叩いて無い金絞りとるようなことをしてるんじゃねえ。もっと悪どいことやってる連中いっぱいいるだろう？　金は！　――あるところにはある。いいか、即金で五百万ポーンと出せるような連中から、俺たちが奪われた資産を取り戻せ。わかったか！
全員　はい！
大谷　超魂（ウルトラソウル）込めてけよ！
全員　はい！

ナイト　最初のころは、随分と大谷さんのお世話になりました。ビビって全然話せなかった俺にプレイヤーのやり方を一から教えてくれて――そんで俺もだんだん出来るようになって、あれ、俺ってもしかして才能あんの？　みたいな。いや、無いんですけどね全く。そう、俺には何の才能も無いんです。

大谷　★なあ、ナイト。
ナイト　はい。
大谷　これからウチはもっともっとデカくなる。使えそうなやついたらどんどん声かけちゃってくれよ。
ナイト　あ、はい。わかりました。
大谷　頼むよ。期待してっから。
ナイト　はい！　がんばります！

ナイト　ってそういう話が出てきて。俺もイケイケだったんで、とりあえずフジとかダーさんとかに声かけて。ま、最初は普通に断られちゃったんで、そのあとケンちゃんに声かけて。したら／ああ、つっても、その頃ケンちゃんは普通に大学とか行ってたんで、まさかやんねえだろと思ったんですけど一応つって声かけたら――。
ケン　いいよ。やってやるよ。

ナイト　あマジで？　めっちゃ助かるわ。
ケン　なんか俺、――向いてそうだ。

ナイト　そのあと、ケンちゃんが声をかけたら、みんなやるっつう話にコロっと変わって――。
ああ、そうなんだ、って思ったんですけどね。でも、俺が言うのとケンちゃんが言うのじゃ全然説得力違いますから。そりゃあ、そうなんですけどね――。

舞台上に佇むナイト。
場面転換。
◇音響：曲out「トバしの携帯」

【初日　Ⅱ】

◎【家族会議　その２　サカエ帰宅】　二十六年　八月十日。深夜

大庭家のリビング。深夜。
暗がりの中で八平がアルバムを見ている。部屋の端には元木が寝そべっている。
サカエ、登場。

サカエ　まだ起きてたんだ。
八平　おう、早かったな。
サカエ　（笑）早かないけどね。二時前なんだから。
八平　朝方帰ってくるんだと思ってた。
サカエ　あとはバイトの子に任せて――結構こういう日もあんだけどね。
八平　あ、そう？
サカエ　（寝そべっている男を見て）て、誰これ？　ナイト君の？
八平　そうそう。お友達連れてきて。
サカエ　すごいいっぱいじゃん。なにあの靴？
八平　ね。友だち百人できるかなって。
サカエ　どこ寝てんの？
八平　和室。
サカエ　えー、布団ないでしょ、だって？
八平　んー、夏だしな。寝袋あるっていうし。
サカエ　でなに？　この人は入りきんなかったわけ？
八平　じゃないのかな、多分。
サカエ　あっそう／なにアルバム？
八平　うん。ちょっと整理しちゃおうと思ってさ。
サカエ　なに、それで見始めちゃったパターン？
八平　順番も何もごちゃーっとしちゃってるからさ。

二人、しばしアルバムを見る。

サカエ　ちょっとちょっと、若いんだけどお父さん。
八平　変わんねえだろそんなに。
サカエ　ハイハイ。まったく変わりません。うーわ、誰この美少女？　ヤバいんですけど。
八平　サカエが可愛かった最後の瞬間だよ。
サカエ　うっさいな。わー、でもあれだよね、誰もこの子がリスカ三昧の日々を送るとは予想できないね。
八平　ホントだよ。

サカエ　え、いいの？　こんな時間まで起きてて？
八平　うん。休みだからさ、明日。
サカエ　あ、平日なのに？
八平　や、ほれ、有給消化しなきゃなんねえからさ。休み多くなってんだ、最近。
サカエ　そっか。えー、いいなー。あたしも欲しいんだけど、有給。
八平　そんじゃそろそろやめるかな――。
サカエ　えー。お母さん出てきたから？
八平　違うよ。

父、アルバムを閉じる。

八平　有給もらう分働いてんだぞ、正社員は。
サカエ　あたしだって正社員みたいなもんだよ。
八平　自由業とは違うんだよ。
サカエ　全然。ライブハウスなんつったって単なるサービス業みたいなもんなんだから。って、そうだあのさ、ここってさ、この家？
八平　ん、なに？
サカエ　お父さんが田舎帰っちゃったあともなんか引っ越しとかしないであたしら住んでたらダメなの？
八平　ええ？　そんなお前、家賃出せねえぞ、俺は。
サカエ　いや、もちろんそれは自分で出すとして。
八平　なんで？　こんなとこ払えねえぞお前じゃ。
サカエ　や、一人では住まないよそりゃ。だからあたしと乙音と、お姉ちゃんももしかしたら住むかもしんないし。
八平　なんだそれ。
サカエ　だってここ、あたしらの家じゃん、と思って。うん。だから。
八平　つったってお前、たかだか五年？　とかそんぐらいにしかなってねえぞ。
サカエ　七年だよ。
八平　まあ、そうにしたってさ。あ、そう。七年？　そんななるか。
サカエ　そうだよ。だからもうちょっとウチらで住んでてもいいじゃん。
八平　でもあれだぞ？　千鶴はこれを機に同棲だって言ってんだからよ。
サカエ　え・でもあの彼氏ってさあ、ホントにいると思う？
八平　え？　なんで？
サカエ　や・なんか、あたしと乙音の間では姉ちゃんの妄想っていうかさ、脳内彼氏なんじゃないかっていってんだけど、
八平　そんなことないだろ。いる――んじゃないのそりゃ。
サカエ　そっかあ！　やっぱいるかあ！
八平　なんなんだよ。

サカエ　あ、だったら向こうの彼氏に一緒に住んでもらってもいいじゃん。ね？
八平　いや、おかしいだろそれは。
サカエ　なんで？
八平　なに？　ここ引っ越したくないの。
サカエ　うん。引っ越したくない。
八平　どうして？
サカエ　えー、やっぱ職場近くて便利だし。
八平　お前がずっと一人暮らしするって言ってたくせによォ。
サカエ　だってあたしら出てったらここ、誰かがまた住んじゃうわけでしょう？　なんか、それが嫌だ。
八平　そんなお前――当たり前だろ？　賃貸なんだから。
サカエ　え、お父さん仕事いつまでだっけ？　十一月？
八平　や、十月ぐらいにはいったん区切りつくと思うけど。
サカエ　あー、じゃ、それまでになんとかしないとだね。あたしも。
八平　うん、まあな。
千鶴　▽なぁに、まだ起きてんの二人とも？

千鶴、登場。

八平　ああ、ごめんごめん起こしちゃった？
千鶴　まあいいんだけどさ。
サカエ　あ、お姉ちゃんてさあ、あの、彼氏ってあれ本当にいるの？
八平　おい。
千鶴　はあ？　なに、どういうこと？
サカエ　いや、実在の人物かなあとかって思って。
千鶴　なに言ってんの？　実在に決まってんでしょ。
サカエ　そっちかあ。
八平　ちょっとおかしいんだなんか。
千鶴　いつもでしょ。
サカエ　え、じゃあさ、なにやってる人なの？
千鶴　別に。普通の仕事だよ。
サカエ　普通？　普通とは？
千鶴　なんか――現場監督的な？　そう、プロジェクト・リーダーだっていってた。うん。
サカエ　プロジェクトとは？
千鶴　だから普通の別に、事務だよ。そういう。
サカエ　具体性が皆無――。
千鶴　それよりさあ、ナイトの友だちなんだけど。
八平　うん。あれな。

千鶴　なに、どういう人たちなの？
八平　まあ、俺もさっきいろいろ聞いてきたんだけどな――。
千鶴　うん。なんだって？
八平　あんまいい人たちじゃないな、あれは。
千鶴　ああ、そう？
八平　はっきりしないんだよ、何聞いても。や、そもそもさ、ナイトがウチ頼るなんてよっぽどだろ？
千鶴　え、なんかあるってこと？
サカエ　ちょっ怖いんですけど。え・なんなの？　てか、今なにやってんだっけあの人？　ナイト君？
千鶴　また怪しいことやってんのかね？
八平　わかんないそういうのは。しゃべんないから。
サカエ　ふーん。じゃあ、こうなったらもうさ、ほっとこう。
八平　おい（笑）　そういうとこ適当だなお前。
サカエ　だってしょうがないじゃん。もう来ちゃったんだから。
八平　まあ、そうだけど。うん、じゃあ、いっか、だな。それじゃ。

と、寝そべっていた元木が起き上がる。
三人、注目。元木、それを感じ取り、

元木　あ、ちょっと、トイレに――。

◆音響：曲in「秘密」
場面転換。

【3】　おんがく

【薔薇】

◎【千鶴語り　その3　秘密】

舞台上に千鶴。

千鶴　ずっと、黙っていたことがあります。
お父さんにも。妹たちにも。ナイトにも。
大谷さんのこと。
運命の出会い、とか、燃えるような恋、とか。
私の人生には何の関わりもないような気がしていて。
人間は、恋と革命のために生まれてきた。
なんて言葉を小説で読んだときには、心底不安になりました。
恋も、革命も、私の人生とはなんの関係もないような気がして。

大切なことはきっと、誰にも何も、ひとつも言えずに終わっていく。
誰かに何かを伝えたい。なんて。とても無意味。
透明な卵のまま、何年もそこで過ごしているような君に、
私は、何が伝えられるだろう？
その卵の内部にいて窒息することも孵化することも許されないような君に、何が、

◇音響：曲out「秘密」

◎【青いバラ　その1】　二十五年　六月某日

地下にあるキャバクラ。
大谷、小柳、大泉がいる。三人、酔っている。

大泉　あー、それはダメ！　ホントに、ホントにダメ。
小柳　えー？　あ、じゃあさ大谷さんこれ知ってる？
大谷　なになに？
小柳　★マナちゃんがね、なんかこないだあいりちゃんのバースデーあったじゃん？　あん時マジでヤバいことになってて、
大泉　それはホント無し！　ホントに、ホントに！
小柳　なんかマジで酔いつぶれちゃって、

大泉　ぎゃー、ホントそれは、かづきちゃん、ホントに、ホントに！
小柳　ちょっとだけだよ。
大泉　ちょっとだけの意味がわかんない！

そこへ千鶴、登場。ソフトケースに入ったキーボードを持っている。

千鶴　すみません――。

一同、静かになる。

大谷　ああと、あなたが――？
千鶴　はい。ナイトの、――大庭です。
大谷　ハイハイ、千鶴さん？
千鶴　はい、千鶴です。
大谷　★お待ちしてました。どうぞこちら（中に入るよう促す）／そんじゃお前らナイト呼んで来てよ。
二人　ええー。
小柳　え、そのあとは？
大泉　★待っててい？
大谷　やあ、ダメダメ。今日はおしまい！
大泉　えー、いいじゃーん。
小柳　せっかく大谷さんお休みなのにィ。
大泉　★そうだよォ。
大谷　またどっか、タイミング見つけてね。
大泉　バック（ヤード）で大人しく待ってるから。
大谷　まあ、とにかく呼んで来てよナイト。
大泉　えー。
小柳　――わかった（立ち上がり、移動）
大泉　▲あ、あたし行くよ、
小柳　▲え？　大丈夫だよ、マナちゃんは――。
大泉　▲いや、かづきちゃん先あがってていいよー。
小柳　▲平気だってー。

小柳、大泉、退場。

◎【青いバラ　その2】　二十五年　六月某日

大谷　すみませんね。もう、うちのはアホばっかりで、

千鶴　いえいえ――（立ち上がって）この度はあの、いろいろとご迷惑をおかけしちゃったみたいで――。

大谷　やあ、いいですよ。友だちが困ってる時に助けんのは、ねえ。どうぞ、お掛けください。

千鶴　あ、はい。――すみませんでした、本当に。

大谷　いや、それよりちゃんと迎えにきてくれる家族がいて幸せですよ、ナイトは。イザって時にそういうのがあると違ってきますから・人間。

千鶴　はあ。

一拍。

千鶴、落ち着かずに周囲を見回す。

大谷　（千鶴の荷物を指し）なんか音楽やってるんですか？

千鶴　え？　あ、これはまあ、すみません、出先からそのままだったんで。

大谷　キーボード？

千鶴　やあ、ちょっとバンド組んでまして――うぉっひょーい、なんか恥ずかしいですね、「バンド組んでます」って――／

大谷　★全然恥ずかしくないじゃないですか。「うぉっひょーい」ってこたないですよ。あー、プロとかを目指して？

千鶴　★全然そんな、お遊びっていうか、趣味、趣味ですホント。

大谷　★え、ピアノとかやってたんですか？　キーボードってことは？

千鶴　あ、はい、ずっとやっててピアノは。先生がなんか、ちょっとヘンな人だったんで――。

大谷　はあ、ヘンな？　髪型が鍵盤になってるとか？

千鶴　いや、そういうんじゃなくて、って、そんなわけないじゃないですかッ！

大谷　おお、はい。

千鶴　なんか「ピアノを嫌いにさせちゃうような先生が多すぎる」って言って。なんでも好きな曲やんなさあい、みたいな感じでなんか、自由にやらせてくれて。

大谷　★ああ、いい先生ですね。じゃもう、全然普通の教室とは違って？

千鶴　ええ、まあ、ちゃんと基礎もやってんたんですけど、話の持っていき方が上手だったっていうか／先生がやる気にさせてくれて。

大谷　大事ですよね、そういうの。特に鍵盤楽器だと基礎がねえ？　大事なんでしょ？／てわかんないで言ってますけど俺も（笑）

千鶴　ま、教室の中では全然、うまい方じゃなかったんですけど、バンドやるってなったらなんか、けっこう弾けんじゃん、みたいなことになりまして。

大谷　え、どんなのやってるんですか？　その、バンドの音楽性っていうか？

千鶴　や、えーとなんか、一応その、（小声）ボストロックといいますか――。

大谷　ああ、ポストロック。じゃ、インストですね？　ボーカルとかいなくて？

千鶴　あ、はい。まあ、うちはボーカルもいるんですけど、ってなんかすみません、関係ない話しちゃって。

大谷　★あ、あ、そうだ。申し遅れましたホントに、（名刺を出し）大谷です。
千鶴　ああ、大谷さん。今、ちょっと名刺切らしてまして――。
大谷　いや、要りませんよ。
千鶴　あ、ですよね、そりゃ。ああ。
大谷　★落ち着いて。
千鶴　はい。あ、大谷さん。なんか・ナイトからちょっと（聞いてます）――。
大谷　あ、そうですか？　どこまで聞いてます？　事情っていうか。
千鶴　★や、何にも。体調悪くてその、入院？　てことになるかもしれないって。あとはここの住所メールされて、大谷さんって人を訪ねてくるようにって。

◎【青いバラ　その3】　二十五年　六月某日

ナイト、小柳と大泉に連れられて登場。フラついているが、なんとか一人で立っている。

大泉　大谷さーん。
大谷　おお、
千鶴　ナイト。
大谷　いや、俺らでずっと面倒見てたんですけどね、あんまり熱が続くもんですから／（ナイトに）座れよ。
ナイト　はい。失礼します。

ナイト、座る。

大谷　そんじゃ表にタクシー呼んどいてよ。
小柳　☆あ、タクシー？　わかった。
大谷　そんでもう上がっていいよお前ら。
小柳　はーい。

小柳、退場。それを追うように大泉も退場。

ナイト　☆悪いね、こんなとこまで。
千鶴　大丈夫なの？
ナイト　や、ちょっと病院行ったほうがいいって。
千鶴　ホントに――。
ナイト　熱がずっとね、下がらなくって。
千鶴　ああ。
大谷　（ナイトに）ちゃんとお礼言っとけよ。
ナイト　ああ、はい。（千鶴に）本日はどうも、ありがとうございました。

千鶴　いや、いいんだけどあたしは――。
大谷　（笑）ボロボロじゃねえかお前、漫画みてえだな。
ナイト　はい。あの、今回は俺がバカやっちゃって――いろいろ大谷さんにご迷惑おかけしちゃいまして――。
大谷　いいよ仕事の話は。お姉さん来てんだしよ。
ナイト　はい。
大谷　（千鶴に）そんな大したことじゃないんですよ、何日か無断欠勤したってだけで。
千鶴　ああ、無断欠勤はでも、良くないですね。
大谷　ええ、ちょっとうちも特殊な業態なもんですからね、無断欠勤いると事務所ごと引っ越さなきゃいけませんから――。
千鶴　あ、え？　事務所ごとですか？
大谷　ええ、それでちょっと大事（おおごと）になっちゃいましてね。（明るく）ま、結果、大したことじゃなかったんですけどね。なんか友だちがピンチだっていうんでナイトは付き合ってただけみたいで――（ナイトに触れ）バカですよホントこいつは。自分がどうなるか分かってんのに付き合い優先して。
ナイト　すみませんでした。
大谷　千鶴さん、俺は思うんですけどね、
千鶴　はい。
大谷　世の中には二種類の人間がいるんですよ。感動をくれるバカと、タダのバカと。
千鶴　はあ――。
大谷　もうね、バカしか感動をくれません、世界に。だからしょうがないんですよ、こういう「感動をくれるバカ」は誰かが面倒みてやんないと。

一拍。

大谷　こいつもなんか必要があっているんですよ、ここに。どんだけアホくせーと思ってもね、なんか意味があるんですよ。なあ、ナイト？
ナイト　（半泣き）ありがとうございます。
大谷　お姉さんいんだからよお前、泣いてんじゃねえよみっともねえ。
ナイト　（半泣き）はい。
千鶴　え、じゃあ、大谷さんはどっちなんですか？　感動をくれるバカと、タダのバカと――。
ナイト　★姉ちゃん、
千鶴　どっちのバカだと思ってらっしゃるんですか？

一拍。

大谷　そりゃもちろん、感動をくれるバカになりたいとは思ってますよ。もたらす、っていうか――。たとえば千鶴さんを感動させたい、そう思ってます。

千鶴　はい。

大谷　でも、役割ってもんがありますからね。千鶴さんが俺を必要としているかどうかっていうのも大きいじゃないですか。

千鶴　そうですね。

大谷　誰だって必要とされる場面はあるんだと思いますよ。なんかあるんでしょう、どんなクズにだって役割っていうか、使い道が。

千鶴　使い道。

大谷　だけどそれは自分じゃわからない。俺が決めることじゃないですからね、俺の使い道は。

大泉　大谷さん、

◆音響：曲in「密会」

大泉、登場。携帯電話を持っている。

大泉　タクシー、上、着いたって。

大谷　ああ、ありがとね。（千鶴に）そんじゃすみませんね。長くなっちゃいまして――。

千鶴　ああ、いえ。こちらこそお世話になりました、いろいろ。

大谷　（大泉に）そんじゃ手伝ってお前も、

大泉　ああ、はい。（千鶴に）あ、あたしが持ちますんで。

千鶴　すみません。

大泉、ナイトを介助しつつ、彼の荷物を持ってやり、退場。

大谷、荷物をまとめている千鶴に近づいて。

大谷　今度ゆっくり話しましょうよ。千鶴さんの都合いい時に連絡してください。

大谷、退場。

ナイト、大泉も退場しているので、千鶴、一人残されたような格好になる。

大泉　千鶴さーん？

千鶴　ああ、はい。すみません。

◇音響：曲out「密会」

◎【設計　その3】　二十六年　十一月十四日

甘粕　「その頃が大谷さんとうまくいっていた最後の時期だったと思います。そのあと、ケンちゃんが中心になって［ナイト・グループ］ってのを作って独立することになって――」

甘粕　なんでまたそういう、独立っていう流れになったんです？

ダーさん　ケンさんと大谷さんが合わなくなっちゃった、つうのが一番でかいんじゃないですかね。

甘粕　でも揉めちゃったんじゃないですか？　人材も大谷さんとこから引っ張ってきてるわけですし。

ダーさん　そりゃ、タダじゃ済まないって感じだったみたいですよ。大谷さんがキレて相当ヤバい雰囲気になっちゃって。

甘粕　ええ、ええ。

ダーさん　ケンちゃんもシメられたっていうか、なんか大ケガとかすることになっちゃって、

甘粕　ああ、指つめちゃったりとか？

ダーさん　いや、そんな本職の人みたいなことはなかったですけど、

甘粕　じゃあやっぱりその、お金で解決というか？

ダーさん　そうすね。だけど大谷さんはずっと納得いってなかったみたいで――。

ケン　ナイトはそれでいい？　今回のこと。

ナイト　うん。ケンちゃんがそういうなら。

ケン　じゃなくてさ。お前にとってもでかい存在だろ？　大谷さん。

ナイト　まあ、でも、態度とか気に食わねえこともいっぱいあるし、俺もホラ、一回、監禁みてえなことされてシメられてるし、

ケン　いいよ、俺に話合わさなくて。

ナイト　え？　ああ、うん（笑）

間。

ケン　俺たちもそろそろ自分の家を持たねえとさ。

ナイト　ああ、家？　なに、ケンちゃん家買うの？

ケン　買うわけねえだろこんな、しょっちゅう引っ越さなきゃいけねえのによ。

ナイト　あー、だよね、だよね。

ケン　じゃなくてホームつうかさ、こう、家族を作んねえと、俺らの人脈でさ。

ナイト　あ、そういうことね、俺らの人脈で――。

ケン　そのためにもまずはあの人潰しておかないとさ。自由になれない気がすんだよ。

ナイト　わかった。うん。なんか、わかる気がするよ。わかんねえけど。

ケン　どっちだよ（笑）

一拍。

ケン　そんじゃやるか、独立？
ナイト　おお。いいね！　やっちゃおうよ！

ナイト　ビビりましたけどね、俺は――。みんなビビッてたと思うんですけどね。ケンちゃん以外は。ケンちゃんはホント、何考えてるか全然わかんなかったんで。正直ちょっと、怖かったです。

ダーさん　それで独立してからは儲けの大半手に入ることになって。もうなんか、すごい時とかは千万単位の金が一日で入ったりして？　おお、最高だなってことになって。

と、ここで甘粕の時計のアラームのようなものが鳴る。

甘粕　はいはい、時間になりました、と――。（ダーさんに）そんじゃ今日はこのへんにして、あとはまた日を改めてってことでもいいですかね？
ダーさん　ああ、いいですけど――？
甘粕　ちょっと私、今日別件で都合ありまして。もちろん、謝礼はまた別で出しますんで、
ダーさん　まあ、じゃあ――。
甘粕　（戸田に）そんじゃ資料だけもらっとくね。
戸田　あ、はい。

甘粕、荷物をまとめる。

ダーさん　あの、
甘粕　はい、何か？
ダーさん　これって、なんで俺なんかの話、聞いてくれるんですか？
甘粕　――仕事ですから。

一拍。

戸田　あ、あの、橋下さんは、もう少しお時間大丈夫ですか？
ダーさん　え？　ああ、別になんもないっすけど。
戸田　（甘粕に）それじゃ私のほうでもう少しお話してもいいですかね？　録音もちゃんと取っておきますんで。
甘粕　別にいいけど、
戸田　ありがとうございます！
甘粕　でも戸田さん、んー。
戸田　はい。なんでしょう？

甘粕　助けてあげられるわけじゃないからね、誰も。――誰かを助けてあげたり、救ってあげたり、そういうことのできる立場でも無いし、そういうお仕事でもないから。
戸田　はい。ちゃんとわきまえて。対処させてもらいます。
甘粕　――うん。じゃ、あとよろしくー。
戸田　お疲れ様です。

甘粕、退場。ややあって、

戸田　ちょっと苦手なんですよね、あの人。
ダーさん　ああ。
戸田　何か飲みます？
ダーさん　はい？
戸田　お茶じゃなんでしょ？　何か買ってきますよ。
ダーさん　じゃ、コーラでも。
戸田　はい。コーラですね。
ダーさん　あ、あの、
戸田　はい？
ダーさん　場所変えていいっすか？　こういう、薄暗いとこはちょっと――。
戸田　はい。いいですよ。じゃあ。

場面転換。

【4】　たいざい

【滞在】

◎【内省と素行　その1】　二六年　八月十四日　夕方

大庭家。和室。

元木、ナイト、フジ、小柳、ケン、ヤッチンがいる。

ケンは一人だけ終始携帯をいじっている。

■音響:効果音、虫の声。

元木　やっぱ大谷さんたちっすかねえ。

ケン　決めつけんなって、そうやって。

元木　でも俺らが抜ける時めっちゃキレてたじゃないっすか？　一番可能性高いのってやっぱそこなのかなあとか思うんすけど。

ナイト　それはケンちゃんがけじめつけただろ。

元木　ま、そうっすけど。

ナイト　何のためにあんな入院したと思ってんだよ。

ケン　いやでも、可能性の一つではあるよ。

ナイト　まあ、そうかもしんねえけど――。

ヤッチン　なんとかなんじゃないっすか？　大丈夫っすよ。

ナイト　いーから、気休めは。

ヤッチン　まあ、死んでるかもしんないっすけど。

間。

フジ　そのうちなんか言ってくるでしょ。向こうから。

ナイト　だといいんだけど。

ヤッチン　や・生きてると思いますよ。だって死んでたらなんも交渉になんないじゃないすか？

ケン　いずれにせよ、向こうの出方わかるまでは俺らも「失踪」継続だからよ。お前らも知り合いからの電話とか絶対受けんなよ。

小柳　うん。わかってるけどそれさあ――／

ケン　★うん、けど、なに？

小柳　え、LINEぐらいだったらわかんないでしょ？　こっちの居場所なんて。

元木　それは絶対そう。

ケン　いや、どっから足つくかわかんねえだろ。

元木　でも、だったらこうやってみんなで集まってる方がヤバくないっすか？　全員いっぺんにやられる方がマズいっていうか。

フジ　ああ――。
ケン　じゃあ、他になんかいい方法あんの？
元木　や、ないすけど、危険な時ほど別行動のがいいのかなって。
ケン　一緒に居たほうがいいんだって。ダーさん奪い返すためにも協力してくれよ。
元木　はい。や、いいんすけどね、別に。
小柳　え・そんな気あんの？　奪い返すって。
ケン　あるよ。チャンスがあれば。
小柳　（笑）え・そしたらイザって時に集合すりゃよくね？　てか、ケンちゃんあれでしょ、誰かがヘタ打つと困るってことだよね？　管理下に置いときたいって？　絶対そうでしょ。信じてないよ、ウチら。
ケン　うん。信じてはない。
ヤッチン　え、え、なんすか、裏で通じてる奴がいるかもしんないってことすか？　こん中に？

ケン、頷く。元木、不安げに立ち上がる。

小柳　（笑）ボロが出ると思うけど。そういうの。
ケン　安全のが優先でしょ今は。
小柳　ケンちゃんの安全ね。ウチらのじゃなくて。
ケン　そうだよ。お前らの自由より俺の安全の方が大事に決まってんだろ。
小柳　――へえ。そうですか。

間。

フジ　結局、金が悪いんだよな。
小柳　なに「悪い」って？
フジ　★金持ってっから狙われちゃってるわけでしょ？　それが原因だよね。
ヤッチン　――だ、としたらなんなんすか？
フジ　や、そもそもさ、――まあ、こんなこといっちゃ元も子もないけど、俺らが使っていい金なのかってのもあるわけじゃん？
ナイト　え・どうしたの急に？
小柳　別にいいでしょ使って。
ナイト　なあ。ちゃんと働いて稼いだ分なんだから。
フジ　いや、その稼いだっつうのもなんか、――別に稼いでねえじゃん？　ていうさ。そういうアレでしょ？
小柳　ええ？
ナイト　なになになに？
ヤッチン　バチ当たるとかそういう話っすか？
フジ　いや、バチとかじゃねえけどさ、なんか、んー。いや、ごめんなんでも無い。

一拍。

ナイト　（ふざけて）まあまあまあ、わかんないことはないよ。そりゃ確かに悪いなって部分もある。まあね、詐欺っつうか、騙してっからね。でも、本当に残念なことなんだけど戻ってこねえだよ、元木がHカップを吸うために使った金は。

ヤッチン　ははは。

元木　★なんすか！　ナイトさんだってクジラみてえな女がいるとか言ってたじゃないっすか。

ナイト　なあ。（フジに）だから要するにまあ、考えんなってことだよ。

ヤッチン　フジさん哲学入っちゃうからなあ。時々。

小柳　ねえ。

元木　いや、俺ちょっとわかりますよ、でも。

ナイト　（楽しそうに）元木？

小柳　☆ウケんだけど。

ヤッチン　☆いいよ、乗っかんないで（笑）

元木　あれすよね、なんか額がデカすぎるっつうか、ちょっと扱える金額じゃねーし、とか思う時あるじゃないすか？　（フジに）とか、そういう話ですよね？

フジ　うん、まあさ、――なんかナイトとかが茶化すっていうか、そういう軽い感じでしゃべってくれんのもわかんだけどさ、誤魔化しきれないっていうか、こんなん続けられるわけないし／

ナイト　いや、誰も一生これで食ってこうってんじゃないんだから。

ヤッチン　そうすよ。

ナイト　適当に稼いで、ある程度まとまった金入ったらあとは好きなことやりゃいいじゃん？　その最初のなんだ、軍資金集めみてえなもんだろ、みんな？

小柳　その割には結構続けちゃってっけどね。

元木　間違いない。

間。

ケン　よく考えてくれよ。――最初に生まれたとき元木ん家はお金持ちだった？

元木　いや。全然。

ケン　小柳だってそうだろ？

小柳　別にうちは、クソ貧乏ってわけでもなかったけど。

ケン　じゃあ、ちゃんとお前を育ててくれるような立派なご両親がいたわけ？

小柳　いや、いねーけどさそんなもん。

ケン　だろ？　フジもさ、被害者から金奪ってるとかそういうクソみてえな話すんだったら、まずは俺らが奪われてただろって？

フジ　★や、でも俺とかケンちゃんは割りと普通に育ってんじゃん？　一応、大学まで行かしてもらってんだし、

ケン　それがなに？
フジ　そりゃ何も家庭に問題なかったとは言わないよ？　うちだっていろいろあったけどさ、でも、どこの家だってなんかしら問題あるわけで、それでも別に、どんな環境だってちゃんとやってるやつはいるわけじゃん？　だから、俺らがなにいったってそんなもん別に言い訳にはならないんじゃないかって、
ヤッチン　いやいやいや、え、それじゃまじめに働いてなかったみたいじゃないすか？　ちゃんとやってきたんじゃないんですか？
フジ　やってきたよそりゃ。死ぬほど働いてきたけどさ、
ヤッチン　はい。
フジ　でも、なんていうか普通にやって稼げる金額じゃねえし、
ナイト　★だからその分普通じゃないリスク背負ってやってきたんでしょ？
ヤッチン　そうっすよ。
ナイト　尋常じゃないぐらい働いて、
フジ　いや、それでも一線越えちゃってんじゃないの、って。人としてやっちゃいけないラインっていうかさ、そういうの越えちゃってんじゃねえのかってやっぱ。
小柳　え、なに一線て？
ナイト　ちょっとよくわかんねえんだけど。
フジ　いや、わかってんだろ、お前だって本当は？　――なんかいろいろなモン麻痺させて、振り返んないようにしていろいろやってっけど、心のどっかではありえねえなこんなモンって。だけどそんなこと言えるわけねえからみんなに合わせてどんどんアクセル踏むみたいにしてさ、いろいろ感情ぶっ殺して、自分の死体出勤させるみたいにして働いて来たんだろ？
ケン　なにビビッてんの？

一拍。

ケン　っうか、やめていいよだったら。誰も頼んでねえし。どうぞ。

一拍。

ケン　そんな罪悪感だかなんだか知らねえけどさ、――自分で決めて自分でやったんだろ？　行動と真逆の正義感振り回したって安いだけだろ。なんか薄っぺらいんだよ言ってることが。

ケン、立ち上がり、

ケン　まあ、お前らもイライラしてくんのはわかるけどさ／小柳もごめんな。
小柳　や、別にいいけど――。
ケン　フジと元木もくだらねえ反省はあとにしてくれ。今それを言うとダーさんが何されてもしょうがねえってことになっちゃうだろ？

フジ　いや、そんなこと言ってねえだろ。
元木　ダーさんのことは別っすよ。それは絶対許せねえし。
ナイト　★うん、うん、当たりめえだよな。（ケンに）いや、そのへんはねえ、フジとか、元木はわかってると思うけどね。（二人に）な？
元木　☆はい。
フジ　☆いや、わかってるよ。

ケン、携帯をしまい。荷物を取る。

フジ　なに、どっか出んの？
ケン　うん。だからあと、頼むわ。
フジ　おお。わかったけど。
ケン　ヤッチン、そろそろ。
ヤッチン　ああ、はいはい。（一同に）そんじゃ今からね、ケンちゃんと二人でおっパブ巡りに行って参りますんで。三泊四日揉みまくりの旅。
ケン　行くぞ。いいから。

ケン、ヤッチン、退場。
と、入れ違いに乙音、サカエが登場。

サカエ　（ぶっかりそうになり）ああ、すみません――おでかけですか？
ケン　ええ、まあ。

少し通りすぎてのち、

ヤッチン　▲貧乳っていうのも味があるっすね。
ケン　▲なんの味だよ。

姉妹、舌打ち。

◎【内省と素行　その2】　二六年　八月十四日　夕方

乙音　あの、ちょっといいですか？
小柳　はい。なんでしょう？
サカエ　これあの、いただきものなんですけど、よかったらみなさんもどうぞ。

果物を渡す。

小柳　あー、ありがとうございます。すみませんなんか。
乙音　いえいえ、
サカエ　あんま取っといても悪くなっちゃうだけなんで。はい。

一拍。

フジ　え、それだけですか？
乙音　それだけって――。はい。
サカエ　ああ、ちょっとナイト君には話あるんだけど、
ナイト　ああ、なに？
サカエ　やあ、ちょっと、まあ、
ナイト　ああ、はいはい。ちょっと悪いんだけど、あのォ。
フジ　おお、おお。
小柳　そんじゃうちはちょっと、

小柳、席を立って移動しようとする。

フジ　ついでにタバコでも行くか。
元木　そっすね。

フジ、元木も席を立つ。

サカエ　吸い殻とか、ちゃんとアレしといてくださいね。
乙音　いや、あの、ちょっと細かいこと言っゃってうるさいかもしれないですけど、
サカエ　あのホラ、ご近所の方にいろいろ言われちゃいますんでなんか。
ナイト　★いや、ぜんぜん大丈夫だよ。☆ごめんねサカエちゃんもなんか。
フジ　やっときます、ちゃんと。
サカエ　どうもー。
フジ　行こう。
元木　はい。

元木、フジ、小柳、退場。

◎【内省と素行　その3】　二六年　八月十四日　夕方

ナイト　ああ、大丈夫？　なんかいろいろ、悪いねうるさくしちゃって。
サカエ　まあ、それはいいんだけど、
乙音　ま、良くもないけどさ、

サカエ　まあまあ、ね。え、そんでいつまでいるの？
ナイト　ああ、なんか、一段落ついたら。
サカエ　なに一段落って？　もう四日目だよ？
ナイト　や、まあ、だから住むとこみつけて／
乙音　★え、なに、家が無いんですか、みなさん？
ナイト　あるよ、あるけど、なんていうか、ちょっといろいろワケありでさ。
乙音　なんですかワケって？
サカエ　いや、そこはそんな深くは立ち入らないけどさ。立ち入りたくもねーし。
ナイト　うん。助かるわ。
サカエ　でも、あの人たち靴ぐらいちゃんと揃えて脱げないわけ？
乙音　タバコ行くたんびにウチらが直してんだからちょっとは考えてよ。
サカエ　あと、冷蔵庫勝手に使うのやめてくれる？
ナイト　ええ？　それはいいってこないだ――／
サカエ　★やっぱダメ。
ナイト　ああ、わかったよ。買うよ、じゃあ。
サカエ　は？　買う？
乙音　冷蔵庫を？
ナイト　うん。なんかウチラ用のちっこいやつ買って、そっち使うようにするから。
乙音　すぐ出てくんじゃなかったの？
ナイト　や、そしたらあげるから、冷蔵庫は。いや、出てくよすぐ。ずっといるために買うってわけじゃなくて、まあホラ、毎日使うもんだからさ。
乙音　★どっから出てくんのそんなお金？
ナイト　まあ、高くないでしょ冷蔵庫なんて？　そんぐらいみんなで出せば別に。
サカエ　（乙音に）じゃあいいやつ買ってもらいたいね。
乙音　ねえ。
ナイト　わかったよ。や、ごめんごめん。なんとかするからさ／ああ、そうだ、あれなんでしょ？　なんかおじさん、田舎帰るとかって言ってね。あれ、どうかしたの急に？

サカエ、ナイトの態度にうんざりという様子。

サカエ　直接聞けば？　なんか話あるって言ってたから。
ナイト　え？　俺に？
乙音　うん。いろいろ聞きたいことがあるんだって。
ナイト　いや、マンツーはまずいでしょ。それはちょっと避けたほうがいいよ。
サカエ　★知らねえよ。とにかく伝えたからねあたしは。――▲せっかくの休みだっつうのに。

サカエ、退場。乙音もその場を離れようとするがナイトが追いすがりつつ、

ナイト　ちょっ、ちょっと頼むよ乙音ちゃんだけでも。いや、ホントヤバいってそれは。
乙音　大丈夫ですって別に。
ナイト　お願いお願い。殺されるからホント。
乙音　▲なんだと思ってんですか人の親を。

◆音響：曲in「人の親」

乙音、退場。ナイト、一人残されて。

ナイト　いや、マンツーは無理でしょ。それはありえない。

ナイト、退場。

【交渉】

◎【交渉　その1　ケンと大谷】　二六年　八月十四日。夜

どこかの飲食店。
大谷、大泉、ヤッチン、ケンがいる。
大谷が大泉に平謝りしている。
◇音響：曲out「人の親」

大谷　だから悪かったっていってんじゃないの、なんでも好きなもの言ってよ。なんとかするからさ。

大泉、答えない。

大谷　あ、じゃあ車とか？　それかマンションでもいいしさ。ホラ、マナの好きなとこに部屋買って住めばいいじゃん、な？
大泉　もういいから。
大谷　あ、いいの？　機嫌直してくれる？
大泉　早く仕事の話しちゃって。
大谷　――（ケンとヤッチンに）だってさ。
ヤッチン　（笑）いやあ、大谷さんも美女の前では型なしですね。
大谷　なあ。困っちゃってよ。
ヤッチン　よっぽどだったんでしょうね。なんだかわかんないですけど。
大谷　いや、ちょっと誕生日をな、勘違いしちゃって。
ヤッチン　ああ。
大谷　そりゃ覚えてはいたんだけどさ、もちろん。だけどホラ、こういうとこの女の子って設定上のやつあるじゃない？　本当の誕生日とは別にさ。
ヤッチン　へえ、そんなんあるんですか？
大谷　あるんだよ、な？　ホラ源氏名じゃないけどさ、7月7日生まれってかわいい、みたいなことなんだろ、だから？
大泉　違うよ別に。
ヤッチン　ああ、個人情報が漏れちゃうとね、なんかあった時に。
大谷　で、勘違いしちゃった割に盛り上げちゃったからさ、俺も。
ヤッチン　ああ、なんか、サプライズとかして？
大谷　そうそうそう。わざと雰囲気悪くしておいてさ、「バカ、おめえ、今日はなんの日だと思ってんだよ、年に一度の！　――ハッピバースデー」
ヤッチン　――気まずいっすね。

大谷　な？　「今日じゃないし」って言われた瞬間のあの、なあ――。どうしていいかわかんなかったもん。
ヤッチン　やあ、きっついっすねえ。
ケン　え、返してくださいよ。ダーさん。

一拍。

大谷　ん？　なに？　なんか言った？
ケン　生きてるんですよね？　まずはそれ確認させてください。
大谷　え、なにいってんの。ダーさん、とかいう人がなに、死んじゃったわけ？
ケン　（立ち上がり）いやいや、もうそういうのいいんでホント。こっちもお願いしますって頭下げてんじゃないっすか。
大谷　え・なにキレてんのこいつ？
ヤッチン　そうっすよねえ、ホント。
ケン　すっとぼけてんじゃねえよ！
ヤッチン　ちょっとナーバスになってんすよ。

ヤッチン、ケンを座らせる。

大谷　なんだよせっかくお前ヤッチンが言うからよ、楽しく食事でもしましょうつって来てやってんのに、不愉快なことばっか言うな、こいつ。
ヤッチン　まあ、何事も遊びがないっつうか――。それがケンの取り柄みたいなとこあんで難しいんすけどね。
ケン　遊びはまたの機会にしてもらっていいすか？　そん時は俺も気取ったクソみてえな女でも連れて痴話喧嘩やらしてもらいますんで。
大谷　ん、なに？
ケン　え、そうしてりゃ愉快なんですよね大谷さんは？　今日そういう感じですもんね。
ヤッチン　★やあ、すみませんホントに。ねえ。
大谷　うん。困っちまうよな、ヤッチンもこんなのと一緒じゃ。
ヤッチン　ええ、まあ、いつも困らされてますよ。
ケン　★何が目的なんすか？　それ言ってもらえないと話はじまんないじゃないっすか。
大谷　★だから知らねえよ。何回も言ってんだろ。
ケン　★金すかまた？　どんぐらいの話なんすか？
大谷　ダーさん？　誰だよ（笑）　そんな奴いたっけって感じなんだけどな。
ヤッチン　ああ、わかんないっすかねやっぱ？　なんかちょっとでも情報あったらとか思ってるんですけどね。あの、大谷さん、いろいろ詳しいじゃないですか？　教えていただけたらすげえ助かるんですけど――。
大谷　まあそりゃ力にはなってやりたいんだけどな、俺だってさ。うん――。

ヤッチン　まあ――あれですかね、知らなきゃしょうがないですもんねえ。
大谷　そうなんだよなあ。
ヤッチン　うーん。そうっすよねえ。

一拍。

大泉　え、もう終わったの？
大谷　ん？　まあ大体な。（ヤッチンに）話ってそれだけだろ？
ヤッチン　え？　ああ、まあ――。
大泉　じゃあ、もう帰ろ。なんか、空気悪いし。つまんないし。
大谷　んー、そうするか。そうだよなあ。
大泉　うん。疲れちゃったなんか。
ヤッチン　じゃあお前だけ先帰ってろよ。そんで家でうんこでもしてろ。
大泉　は？
大谷　ヤッチン？
大泉　なにいってんのこいつ？
ヤッチン　ああ！（大泉のスマホを投げ捨てる）目障りなんださっきから！
大泉　ああ！
大谷　ちょっとやめろやめろ。そういうのやめてくれ、今日は。
ヤッチン　ああ、もうすみません。ほんとダメなんすよ俺こういう女。
大谷　（ヤッチンに）★なんなんだお前もよ。
大泉　え・拾ってくださーい。

一拍。

大泉　ちょっと拾ってくださーい、そこのヤッチンとかいう人。
ヤッチン　★なんで俺が拾ってくんだよ。ちっとは空気読めブス。
大泉　★（かわいく）いいからさあ。え、なに？　あたしがブスだったらヤッチンの顔面がどういう扱いになっちゃうのか心配でたまらないよ。
ヤッチン　なに？

と、ケンが席を立ち、携帯を拾ってくる。それを大泉に渡す。

ケン　あ、落ちてましたよ。

大泉、一瞬躊躇するが、受け取る。

大泉　――どうも。

ケン、席に戻り、

ケン　（ヤッチンに）ああいうのは平気なんだよ。
ヤッチン　☆わかんねえもんすね。
ケン　いや、わかんないのはそっちでしょ。
ヤッチン　ああ、そうっすか。
大谷　☆え、大丈夫だったそれ？
大泉　ううん。割れちゃった。
大谷　ああ、そう？
大泉　ちょっともう最悪なんだけど。

ケンとヤッチンは席を立っている。

ヤッチン　そんじゃ今日は失礼しますんで、お時間取らせちゃって申し訳ありませんでした。
大谷　ああ、そう。そんじゃまた遊ぼうよ。
ヤッチン　はい。失礼します。

二人、帰りかける。

大谷　ああ、ひとつケンに前から聞きたかったんだけどよ。
ケン　はい。なんすか？
大谷　お前なんであんなしょんべんくせえガキ連れて歩いてんのいっつも？　足手まといになるだけだろ。
ケン　は、なんの話ですか？
大谷　切るとこ切っとかないと組織なんてもたねえぞ。
ケン　ああ、そっすか――。え、ダーさんって誰、って感じじゃなかったんですか？
大谷　知らねえよ。そいつはだから。

間。

ケン　そういう考えだから人が離れてくんですよ。
大谷　ん、何？
ケン　切るとか切んねえとかそんなことばっかいって。周りの人間みんなバカにして。嫌なんですよ俺、大谷さんみたいになるの。
大谷　おめえ、誰のおかげで一人前になったと思ってんだ？
ケン　いや、だからグループ抜ける時に散々詫び入れてんじゃないっすか？　今更ウチの人間さらってくとかスジ通んないっすよ。

大谷　そういうのがお前の残念なとこだよ。せっかく頭いいのにどうでもいいバカにこだわって。小せえんだよ、見てるもんが。
ケン　別に見たかないですよ、でかいもんなんて。つうかなんすか、でかいもんて？
ヤッチン　そりゃあやっぱりね、Ｊカップとかね。でかいんじゃないすかねー？　パオーンつって。――どうっすか？
大谷　（笑）――行けよもう、いいから。
ヤッチン　はい。今日はじゃあ、失礼しますんで。（ケンに）行きましょう。
ケン　うん。

ケン、ヤッチン、退場。

◎【交渉　その２　マナと大谷】　二六年　八月十四日。夜

大泉　ああいう感じで大丈夫でしたかね？
大谷　うん、良かった良かった。
大泉　あ、ホントですか？
大谷　演技力あんじゃん、マナ。
大泉　なら、いいんですけど――／てかもうめっちゃ怖かったんですけど！
大谷　ごめんごめん。
大泉　なんなのあの人たち。
大谷　ね。あー、それも今度弁償するよ。
大泉　や、これはまあ、営業用なんで別に壊れてもいいんですけど――。
大谷　っていったって割れたまんまだと嫌でしょ？
大泉　ま、そうですけど。
大谷　そしたらギャラに上乗せしとくからさ。いーよ今日はもうあがって。
大泉　あ、はい。じゃあ。――あの、
大谷　うん？
大泉　このあとって大谷さんは――。
大谷　仕事。

一拍。

大泉　さっきのあの、ケンさんとはどうしてこんな仲悪くなっちゃったんですか？
大谷　ん、何で？
大泉　だってケンさんて昔、大谷さんが一番信用してるって言ってた人ですよね？
大谷　言ったか、そんなこと？
大泉　言ってましたよ。筋が通ってるっていうか、自分の役割をわきまえてる奴だって。

一拍。

大泉　あの、大丈夫、なんですよね、ダーさん？

大谷　何が？

大泉　いや、何っていうわけじゃないんですけど、怪我とかしないのかなって、いや、あたしのせいっていうか、そういうのもあるから、なんか心配で――。

大谷　大丈夫だって。ちょっとお灸を据えてやってるだけなんだから。

大泉　はい、でも――。

大谷　言ったよな？　マナのいいところは、余計な口を出さねえことだって。

大泉　あ、はい。そう、ですね。

一拍。

大谷　お前もそう思う？　周りの人間をみんなバカにして、誰も信用してないって？

大泉　いえ、大谷さんはそんな人じゃないです。本当はとっても優しい人です。

大谷　それもマナのいいところだな。いつでも真顔でお世辞がいえる（笑）

大泉　お世辞じゃありません。

大谷　冗談だよ（笑）

大泉　――あたし、嬉しかったですからね。こないだ、プレゼント。

大谷　うん。ありがとー。

大谷、「どうぞお引き取りください」というジェスチャー。

大泉、退室。

◎【交渉　その3　小柳と大泉】　二六年　八月十四日。夜

小柳、大泉、登場。以下、二人の電話によるシーン。

大泉　はい。

小柳　マナ、ちょっといい？

大泉　ああ、うん。どうしたの？　かづきちゃん。

小柳　どうしたのじゃねえよ。聞いたよ、あいりから。あんたなにやってるかわかってんの？

大泉　は？　え？　何が？

小柳　ダーさんはあんたの彼氏じゃなかったの。

大泉　え？　うん、そうだよ。

小柳　どんな気持ちするかわかってんの？　あんたに裏切られてダーさんがさ。

大泉　や、ごめん、どうしたのかづきちゃん？

小柳　しらばっくれてんじゃねえよ。言えよ、どこいんだよダーさん？

大泉　うん。それはあたしだって知りたいんだけど――。
小柳　★ああ、もう昔っからあんたみたいなのすっげえ嫌いなんだよね。クズ。死ね。
大泉　――なんか、口悪いね、今日、
小柳　なに？　大谷さんに言われてダーさんハメたってことだよね？　まあ、あんたが誰と何しようがそんなのはどうでもいいんだけどさ、ダーさんは今ナイト・グループの人間なんだからあんま覚悟のねえやつがホイホイ首突っ込まない方がいいと思うよ？
大泉　まあ、別に首突っ込んでないからよくわかんないんだけど、
小柳　あんたなんかコマとして使われてるだけなんだから、ちゃんとそういう自覚持ちなって。
大泉　はあ？
小柳　イザってなったら大谷さんはあんたのことなんか平然と切るよ。そういう人じゃん？
大泉　いや、何もわかってないくせに知った風なこといわないでくれる？
小柳　知ってるよ。一応こっちはあの人の下で働いてた時期だってあんだからさ、どういう人間かってことはむしろあんたより知ってるぐらいだよ。
大泉　そんなわけないじゃん。何えらそうにいってんの、というか、あんたなんか大谷さんに拾ってもらってなかったら未だにウリやってるぐらいしか能の無いかわいそうな女じゃん？　どの口であの人の悪口言ってんだ、って感じだけどね。そうじゃない？
小柳　うっせえ、死ねクズ。
大泉　（笑）ほーんと偏差値低そうな悪口。教育の無い人って哀れだね。
小柳　使い捨て女のくせに生意気なんだよ。
大泉　ああ、ダーさんのこと気にしてくれてるみたいだけどさ、なんかどっか行っちゃったよ、あの人。
小柳　だからお前らがさらってんだろ？　どこいんだよ今？
大泉　知らなーい。――どっかでバラバラにされて動物の餌にでもされちゃってるのかもね。
小柳　ホント最低だな、あんた。

◎【交渉　その４　千鶴と大谷】　二六年　八月十四日。夜

■音響：効果音　電話・着信音。

大谷　あー、ごめん出られなくて。どうかした？
千鶴　あ、今、大丈夫ですかちょっと？
大谷　うん、こっちからかけてんだから。
千鶴　いや、今日とかちょっと、会えないかなあ、なんて。
大谷　ああ、今日はちょっと仕事入っちゃって。
千鶴　部屋で待ってちゃダメ？　合鍵使って入ってるから。
大谷　ん？　ああ、そうだね。いや、今はね、あの部屋はちょっと別件で使っているからダメ。
千鶴　ああ、そうなんだ。え、誰か別の女の人とか？
大谷　いや、ちょっと仕事で。使ってるからさ。

千鶴　ふーん。急に入ったりしたら怒る？
大谷　いや、怒るっていうか、全然、ダメダメ。仕事の人がいるからさ。無理言わないでよ。
千鶴　嘘ばっかり。
大谷　うん、え？　何が？

間。

大谷　もしかして千鶴さん今日、あの部屋に行った？
千鶴　行ってないよ。
大谷　んー。だよねそりゃ。
千鶴　行くわけ無いじゃん。
大谷　うん、まあ、だったらいいんだけどさ。
千鶴　え、もし行ってたらなんかあったんですか？　見られちゃまずいような何か？
大谷　いや、別に。千鶴さんの知ってる通りだよ。

間。

大谷　お前なんなんだよ？　どうしたいの？
千鶴　迷惑ですか？
大谷　んー、そうだね。仕事の邪魔されちゃうと流石にさ。
千鶴　人を縛って監禁しておくのが仕事ですか？
大谷　（笑）いやいや、しらばっくれるなら最後までシラ切んないと。
千鶴　答えてください。それが仕事なんですか？
大谷　え、なにお前いま、あの部屋にいるの？
千鶴　――だとしたらなんなんですか？
大谷　ええ？　なんもしてねえだろうな？　解いたりしてねえよな？
千鶴　――何がですか？
大谷　いいから答えろよ、縛られてたやつになんもしてねえだろうな？
千鶴　どっか行きました。

一拍。

大谷　ああ、そう。――はい、それじゃあねー。
千鶴　★私はあの――子供とか産めません。
大谷　は？　別に子供産んでほしいって言ったことないでしょ俺？　なに？
千鶴　考えたんです。あたし。でも、わからないんです。
大谷　何を？

千鶴　大谷さんお金だったらいっぱい持ってるし、きっと、お金で買えるものだったら、もう全部買っちゃってると思うんです。

大谷　なんの話急に？

千鶴　あたしと、大谷さんとの間の何か証拠っていうか、残したいんです。これは本当にあったことなんだって。だから、大谷さんに何を残してあげられるんだろうってちゃんと考えて。音楽を――。

大谷　音楽？

千鶴　はい。そんな、子供とかに比べたら全然残んないものですけど、でも大谷さんに音楽を聞かせてあげることはできるかもしれないって。残らないですよ、でも、残したいって思って。だけど大谷さんは別に音楽なんて好きじゃないし、いや、私だって音楽を自分でやるのが好きなだけで、こっぱずかしいですよ。何がポストロックなんだって。

大谷　ちょ、ちょっとさ、千鶴さん。

千鶴　聞いて下さい。最後にしますから。もう、今日で本当に最後にしますから。

一拍。

千鶴　毎日、大谷さんのそばにいて音楽を届けます、とか。そんなバカなこと考えてみたりもしたんですけど、でも、そんなことじゃない。じゃあ料理を作ってあげたり？　おいしいコーヒーを淹れてあげたりとか？　でも、そんなの誰だってできます。って考えて、あれ？　無いんだ？　え？　無いのって。あたしが大谷さんに残せるものって本当に何もないの？　うそ？　って思っちゃって。

大谷　（笑）真剣だね。なんか。

千鶴　大谷さんのことをちゃんと、本当に理解してあげられるとか？　いや、してないんですよ。普通に何考えてるのか全然わかんないし。仕事だって、本当の気持ちだってなんにもわかんないですよ。だったらなんで大谷さんは私と一緒にいてくれたんだろう？　って考えて、私の何が好きで？　って――。

大谷　うーん。

千鶴　考えるだけ無駄でした。――好きじゃないんですよね、別に最初から。落とせそうな女がたまたま近づいてきたってだけ。それに、大谷さんだってあたしのことなんて何も知りません。大谷さんだけが私の価値をわかってくれてるなんてそんなの、とぼけた話ですよね。――だから何を、――してきたんですかね、あたしたち。

大谷　あーのさ、うん――。ちょっと今、忙しいからさ。ごめんね。

一拍。

千鶴　はい。こちらこそ、いろいろ、すみませんでした。

大谷　▲うん、はーい、じゃあ、ねえ。

大谷、退場。そのあと、千鶴、退場。

◆音響：曲in　「放課後の世界」

◎【小劇場　その2　ナイト】　間接

舞台上にナイト、そして資料を持った甘粕が登場。

ナイト　ガキのころからずっと思ってたんですけどね、――なんか世の中には二つ世界があるんだなァって。――なんでもひとしきり揃ってるやつが、まあその、「揃ってるよね」ってことを前提にして進める［授業の世界］と、あと、なんでもありの［放課後の世界］と。放課後はルールなんかなんも無いですから。ホラ、基本学校とかって［授業の世界］基準にして進んでくでしょ？　だから無理ゲーなんですよ、俺らみたいのにとっては。たとえばなんか、ゲームとかがクラスで流行ってるとするじゃないですか？　でどっちが強いか、とかみんなでアイテム交換とかして勝負してるんですけどね、いや、ゲーム機持ってねえし、っていう。でもまあ、こっちはゲームどころじゃねえし（笑）　って感じだったんでいいんですけどね、そんなの――。ただ、俺みたいのはずっと［放課後の世界］で生きてきちゃってるわけですからね。放課後には放課後の勝負が？　戦い方があるんですよ。

◎【交渉　その5　戸田とダーさん】

甘粕の部屋の近く。戸田とダーさんがいる。

戸田　だからって、そんなことやって悪いとは思わないの？

ダーさん　思いますよ。悪いことです。

戸田　だったらやめなよ。だってお年寄りとかがショックで病気になっちゃったりとか、自分のお薬が買えなくなっちゃったりとかして、本当に困ってる人もいるわけでしょ？

ダーさん　でしょうね。――誰にとってもお金は大切なものです。

戸田　じゃあもっとそういうさ、想像力を働かせてみましょうよ。

ダーさん　いや、働かせてますよ、想像力。むしろ毎日想像しまくりでしたからね、俺ら。

戸田　そうですか？

ダーさん　だってあれですよ、電話する時はいつも、自分が起こしてもない事故で？　居もしないヤクザに金要求されてるって設定で話するんですよ？　もう、頭フル回転で想像しまくんないと。もう、電話の向こうにばあちゃんの顔見えてましたからね。ふぁーって。

戸田　★ふざけないでよ（笑）

ダーさん　★どこがふざけてるんですか？　――そんな中途半端な気持ちでやってたら一瞬でバレますよ。みんなバカじゃないんですから、こっちも真剣に――信じてもらうためにやってるんです。

戸田　騙される方が悪い、ってそういう話？

ダーさん　いいえー。どう考えたって騙すほうが悪いですよ。良いか悪いかで言ったら。
戸田　じゃあ、やめなよ。
ダーさん　――簡単にいいますよね。
戸田　そりゃ一回そういう道に入っちゃったら抜けるのは大変だろうとは思うけどさ、でも、
ダーサン　でも俺、自殺だけはしたくないんですよ。
戸田　――自殺？
ダーさん　はい。
戸田　どうして急に自殺の話になるの？　別にちゃんと普通にさ、悪いことしないで生きていけばいいじゃない？　まっとうに。
ダーさん　無理ですよ。
戸田　どうして？
ダーサン　というか逆に、戸田さんはどうして自分だけはまっとうに生きていけるんだってそんな自信満々に思えるんですか？
戸田　別にそういうわけじゃないけど、
ダーさん　★怖いわ、むしろ。

ダーさん、歩き出す。

ダーさん　俺はあの、どっかの子供が餓死していても、マックでハンバーガーとか喰って、途中で飽きたら捨てます。また、買えるんで。

一拍。

ダーさん　「クジラを殺すのはかわいそう、だから豚さん殺しましょう」って、そこまでバカになりきれませんよ（笑）　刺し身作る時に魚がかわいそうとか？　カニみそ食う時に残酷ですねとか？　――言いたい人は言ってりゃいいんじゃないっすか？　いいと思いますよ、それが楽しいんなら。

ダーさん、別の場所に座る。

ダーさん　騙される方が悪いとは言いませんよ。でも、騙された人は騙されちゃったんですよ。良いとか悪いとかじゃなくて、弱かったんです。
戸田　でもさ、
ダーさん　弱い人間なんか誰も助けてくれないでしょ？　当たり前じゃないですか。
戸田　そんなこと無いよ。助けてくれる人いるって。弱い人にだって手を差し伸べてくれる人はいるし、

ダーさん　じゃあ、銀行はお金返してあげるんですか、騙された人に？　――どんなに温かい気持ちから振り込んでいたって「かわいそうね」っていうだけです。だからみんな、今度は騙されないようにって注意する。そういうもんじゃないんですか？

戸田　そんなことばっかりじゃないよ。

ダーさん　★そうですかね？

戸田　だって、そんな生き方じゃ不安でしょ？　誰も信用できなくて。ダーさんだってそんな世の中になっちゃったら嫌じゃないの？　やっぱり基本的には本当のことを言って、人を信じて、信じてもらって、助け合って、そうじゃなきゃうまくいかないよ。

ダーさん　★なにいってんの？

一拍。

ダーさん　や、俺は誰かが信じてくれるとか思ったことないんで。だって俺がホンキで困ってて、「マジでヤバいんすよ」っつってる時に、どなたか信じてくださいましたっけ、って話ですよ。

戸田　じゃあ、あなたがやってることはそういう、自分を信じてくれなかった社会への復讐っていうか／

ダーさん　ああ、まあ、最初のころはちょっとは思ってたかもしんないっすね。復讐って。ま、でも自分への言い訳ですけどね、そんなの。儲ける方法があったから儲けただけですよ。

一拍。

ダーさん　それにまあ、被害者のことなんか考えなくなりますよ、すぐに。もうネタでしか話題になんない。戸田さんだってハンバーガー食べるたんびに「あの牛さんの一生はなんだったの？」って、考えたりしないでしょ？

戸田　そりゃ考えてはないけど――／

ダーさん　そんな奴いたら頭オカシイすよ。というか、趣味が悪い。だからね――他人の痛みからは目を逸らした方がいいんすよ。それもまあ、優しさの一種じゃないですか？

戸田　だけど人間と牛は違うでしょ？　人間には心があって被害者の方はひとりひとり苦しんでいるんだよ。

ダーさん　やめてくださいよ、牛には心なんか無い、みたいな言い方は。心があったって弱いやつ食いもんにするのを辞めないでしょ、人間は？　だから俺も、牛さんかわいそうっつって餓死するつもりはありません。それって自殺じゃないですか？

一拍。

ダーさん　それにこう言っちゃなんですけどね、俺がガキの頃に喰ってたもんなんて絶対戸田さんの家のドックフード以下の値段すよ？　俺にだって一応、心があったんですけどね。でも、そんなことは関係がない。当たり前じゃないですか？

一拍。

ダーさん　なんか喋りすぎましたね。すみません。

戸田　いえいえ。お話を伺うための時間ですから。

ダーさん　それじゃ、まだ続けます？

戸田　いや、もういいです、今日は。続きはまた次回に。

ダーさん　あるんですか、次回が？（笑）

一拍。

戸田　やりますよ。必ずね。

◇音響：曲out「放課後の世界」

◆音響：曲in「リアル」

場面転換。

【5】　だんらん

【団欒】

◎【一家団欒　その1】　三人姉妹　二十六年　八月十五日。夕方

サカエ、登場。牛乳のパックを持っている。

サカエ　なんかあの人たちめっちゃキレイに掃除してたね。
乙音　へえ、そう？
サカエ　風呂場とかもう、見たこと無いぐらいキレイになってたよ。
乙音　ふーん、なんでなんだろうね？
サカエ　ねえ？
千鶴　ナイトじゃない？　あいつがやってんだよきっと。
サカエ　ああ、そう？　（乙音に）なにパシられてんの？
乙音　いや、それはわかんないけど。
千鶴　丁度いいや。ねえ、サカエは何も聞いてないんでしょ？　お父さんから？
サカエ　ん、何が？　聞いてるって？
千鶴　（乙音に）いいよね？　話して？
乙音　それは――お姉ちゃんが決めることだから。
サカエ　ん、なになに？

▽【小劇場　その2　小柳】

◇音響：曲out「リアル」　左の台詞中に消えきる。

舞台上、姉妹と少し離れたところに小柳、そして元木がいる。

小柳　小さい頃はさあ、毎日、家族でテーブルを囲んで朝食を食べてて、
元木　うんうん。
小柳　お父さんはいつもボーッとテレビ観てて、それでなんか、お兄ちゃんはいつも一言もしゃべらなくって、お母さんばっかりいろいろとしゃべっている、みたいな。
元木　うんうん。
小柳　真っ白なご飯と、暖かいお味噌汁があって、卵焼きとお野菜と、なんか焼き魚みたいのがあったりしてさ。ていうね、そういうなんか、アニメを見て。
元木　アニメかい。なんだよ。
小柳　つか、そんな風景が実際にあんのかー、と思って。ビビんなかった？
元木　ここ来てね。

小柳　そう。
元木　それはビビった。
小柳　ねえ。
元木　え、実際はどうだったわけ、小柳んちは？
小柳　うち？　うちはだから、母親はずっと体調悪くて寝込んでて、まあ、たまに元気な時あって
　もどっか行っちゃってたし。だから基本コンビニで買って終了。みたいな。
元木　あー。
小柳　――でも、それでよくね？　別に？

◎【一家団欒　その2】　三人姉妹　二十六年　八月十五日。夕方

サカエ　え、そうなんだ。えー、そう――。
千鶴　うん。
乙音　――気づいてないフリじゃなかったんだ。
千鶴　天然か。
サカエ　天然、だよ、ええ？　乙音も知ってたの？
乙音　うん、まあ。
サカエ　えー、なになに？　ていうか、え？　なんであたしにだけ言ってくんなかったの？
乙音　いや、別に黙ってたってわけじゃないけど――。
千鶴　知ってんのかと思った。
乙音　あたしも。
サカエ　や、知らないよそんなの。ええー、知らなかった全然。え、なに死ぬの？
乙音　うーん。
千鶴　★そういう言い方はないでしょ。
サカエ　言い方なんかどうだっていいじゃん、え、どうなの？
千鶴　や、なんかそんな明日をも知れぬ、って感じじゃないみたいよ。十年？　とか全然行けち
　やうかもしんないし、そうそう。
乙音　まあ、三年ぐらいでポックリっていう場合もあるみたいなんだけどね。よく分かんないん
　だって、そのあたり。
サカエ　うわ、うわ、うわ、えー、ちょっと待ってよ、――あああ、アルバムとかめっちゃ見て
　た。見てたわあ。え、え、えー。ヤバいヤバいヤバい、なんかおしっこ行きたくなってきた。
乙音　ちょっと！
サカエ　え、そんでなに、それと実家に帰るのとなんか関係あるわけ？
千鶴　や、それは本人に聞いてよ。あたしに聞かれても／
乙音　いや、ダメなんじゃない？　そんな直接聞いちゃ。
千鶴　――ああ、そっか。
乙音　うん。
千鶴　やっぱダメ、聞かないで絶対。

サカエ　なんで？
千鶴　あたしから聞いたってバレるじゃん。
サカエ　そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？
千鶴　いや！　絶対聞かないで。いい？　ここであたしが信用失うとあんたも困ることになるよ。だってね、「あたしに言ったことはみんなバレる」って思ったら今後誰にもね、なんにも言わなくなっちゃうかもしれないでしょ？　ね？
サカエ　んん。なんか。んん。腑に落ちないんですけどものすごく。
千鶴　わかるわかる。なんでうちのお父さんが、っていうね。
サカエ　いや、そうじゃなくて、ってまあ、それもあるけど。ていうかなに、なのにお姉ちゃん断ったわけ？　一緒に実家帰るの？
千鶴　そうだよ。
サカエ　鬼！　――毛ガニ！
千鶴　毛ガニってことないでしょ――仕事あんだからこっちだって。
サカエ　そんなの向こうで探せばいいじゃん。資格持ってんだしさ、姉ちゃんは、
千鶴　★そんな簡単に言わないでよ。
乙音　え、なに？　一緒に帰ろうって言われたのお姉ちゃん？
千鶴　ん？　まあ、なんか、軽く冗談みたいな感じでね。
乙音　へえ、そうなんだ。

一拍。

千鶴　とにかくまあ、そういうことだからさ。
サカエ　って、え？　どういうこと？
千鶴　あんまワーワー言わないであげてって。そうしたいんだろうから。

八平、登場。手に新聞を持っている。

八平　お、珍しいな、三人で。

サカエ、退場。

八平　なんだあいつ？
千鶴　さあ？

◎【一家団欒　その3】　二六年　八月十五日。夕方

八平、腰をおろし、新聞を机に置き、

八平　もうじき無くなっちゃうんだってな、あの村。
千鶴　え、村？
八平　やあ、実家のさ、あのあたり、
千鶴　ああ、そうなの？
八平　うん、（新聞を指しっつ）なんか、そういう統計が出てんだってよ。このまま行ったらあと何十年後には人がいなくなりまーす、っていうさ。
千鶴　ま、でも、このままは行かないかもしれないわけでしょ？
八平　んー、つっても村だからねえ（笑）　「なんとか村」なんて言ってるとこはどこも危ないんじゃない？
乙音　でもお父さんはそこに帰るんでしょ？
八平　まあね――。俺が帰っても居場所ないような気もすんだけどな。実家は兄貴がいるし。
千鶴　ああ、まあねえ。
乙音　★ねえ、本当に帰っちゃうの？　富山。
八平　ん？　ああ、富山、そうねえ。
乙音　どうして？
八平　どうしてって――。
乙音　東京にいて、ずっと一緒に住んでればいいじゃん？
八平　んー、こないだ話したでしょそれは（笑）
乙音　こないだ？　いつ？
八平　えー？（笑）
乙音　だって理由なんて話してくれたことないじゃん。「帰る帰る」っていってるだけでなんにもさ。
千鶴　乙音。
乙音　なに？
千鶴　お父さんにはお父さんの考えがあるんだから。
八平　そうそう。
乙音　だからそれを聞かせて欲しいって言ってるの。おかしい？
千鶴　別におかしくはないけど／
乙音　お姉ちゃんだってヤじゃないの？　お父さん富山に帰っちゃったら今みたいには会えなくなるんだよ？　みんなバラバラになっちゃうし。
千鶴　★でも帰ろうと思えばすぐじゃない？　新幹線だって通るし。
八平　そうそう。もう何年かしたら今よりずっと早くなるっていうしな。
千鶴　あ、ね。
乙音　（立ち上がり）こっち住んでるのとは全然違うでしょ。
八平　気が立ってるね。

一拍。

乙音　ズルいよだって。
八平　ズルい？
乙音　東京がそんなに嫌なとこ？　こんなとこで生きていきたくないって、そういう意味のことをお父さんは言ってるわけでしょ？　でもそこに住んでくんだよ、あたしたちは。じゃあなに、嫌な場所に住んでてもいいの？　あたしたちは。
八平　★ちょっと、お茶淹れてくれよ。
千鶴　え、うん。乙音は？
乙音　いいよ、いらない。
八平　どうして？　飲めばいいじゃない。
千鶴　コーヒーだったら飲む？
乙音　――。
千鶴　お砂糖はいれない？　ミルクだけ？
乙音　うん。

千鶴、コーヒーを淹れにいく。乙音、座る。

八平　でも乙音はTokyoに住んでたほうがいいんだろ？　お前のやりたい、なんだ、デザイン関係の仕事にしたってさ、やっぱりこっちの方が（働き）口は多いんだろうし。それにお前、田舎苦手だろうしな。
乙音　苦手じゃないよ別に。好きだよ。
八平　でもオロロが出た時に大騒ぎしてただろ。
千鶴　してたしてた（笑）
八平　なあ？　そこら中殺虫剤撒き散らして。
千鶴　蚊取り線香炊きまくってね。
八平　年中あんなことやってたら疲れちゃうぞ。お前だって。
乙音　お父さんがでしょ。
八平　え？
乙音　そうやってあたしが騒いでたらお父さんが疲れちゃうんでしょ。
八平　俺は別に疲れやしないけど――。
乙音　「都会が大好き、田舎は嫌い」ってそういって欲しいんでしょ。
八平　そんなことないよ。ちょくちょく田舎にも帰ってきて欲しいし。
乙音　たまにね。たまに帰ってくればいいんだよね。
八平　俺だってこっちにはちょくちょく来るだろうし。お墓参りだってあるわけだからさ。
乙音　でも一緒に住みたくはないんでしょ？　あたしとは。
八平　ん？　なに？
乙音　あたしとは一緒に住みたくないんでしょ？　お姉ちゃんと違って。
千鶴　――うーん（笑）

八平　ああ、そういうこと言ってんの？　それは違うよ、だって、千鶴はお前、あんまりTokyo馴染んでないだろうしさ。
千鶴　んなことないっての。馴染んでるよあたしなりに。
八平　そうかあ？
乙音　いつも言ってたもんね。チィ姉ちゃんが一番お母さんに似てるって。
八平　ええ？
乙音　若いころのお母さんと同じ顔してるって。
八平　見た目の話ね。性格はぜんぜん。
千鶴　サカエのが似てんじゃない？
乙音　そういう問題じゃないよ。
八平　じゃ、どういう問題なんだ？

間。

乙音　わかんないよ。
八平　それじゃこっちだってわかんないだろう。
乙音　★あたしだって虫が好きになるかもしれないじゃん。虫とか全然大丈夫になって、オロロなんて平気で潰せるようになるかもしれないじゃん。
八平　お前が？　無理だろそれは（笑）
乙音　そうやっていつまでも子供扱いしてればいいじゃん。話が分かんないやつみたくしてればいいじゃん。
八平　★ごめんごめん。そういうつもりじゃ無かったんだけど／
乙音　お母さんが、
八平　うん。

間。

八平　お母さんが、なに？
乙音　あんたは自由にやんなさいって。それしか言ってくれなくって――。チィ姉ちゃんとかサカエちゃんにはいろいろ言ってたのに。ああしなさいこうしなさいみたいなことといろいろ言ってたのにさ、あたしには何も言ってくれなくて。
八平　そりゃお前がそういう性格なわけだからさ。
乙音　★そういう性格？　どういう性格？
八平　んー、なんでも自分でちゃんと決められるっていうかさ。ホラ、お前はやりたいこと昔からはっきりしてたわけだし。学校でもなんでも自分で選んで決めてくるだろ？
乙音　当たり前じゃん、そんなの。みんなそうしてるよ。
八平　それが姉ちゃんたちはそうでも無かったからさ。
千鶴　そんなことないよ別に。

八平　そうだったんだよ、お前なんか特に。
乙音　★あたしだってさ――そりゃサカエちゃんはあんなだし、あたしぐらいはちゃんと自分でやること自分で決めないといけないじゃん。自由にやんなさいって、それはなんか、いいけどさ――。なんか、あたしのことはいいのかな、って。なんとかなんだろうみたいなさ――雑じゃないそれってちょっと？　とか思っちゃって。思っちゃうじゃん、どうしても。だって／いや、いっぱいかわいがってもらったよ。いっぱい、もしかしたらお姉ちゃんたちよりずっとずっと、いっぱいかわいがってもらったのかもしれないけどさ、でも、なんかちゃんと、あんたはこういう子なんだからこうしなさい、みたいなことを言ってもらってるわけじゃん、お姉ちゃんとかは。あたしは？　って。あたしはどういう子なの？　ってなるじゃん。なっちゃうじゃん／いや、わかってるよ。でもお母さんがさ、最後に――あたしにどうなって欲しいのかなって。聞いておきたかったよ、そういうのいっぱい。
千鶴　（コーヒーを渡しながら）はい。
八平　ああ、ありがとう。
千鶴　ちょっとお砂糖入れちゃったけど。
乙音　うん。

間。

八平　お前が中学だかの時にさ。
乙音　うん。
八平　なんかお前が読んでる漫画のことで母さんと喧嘩になったの覚えてるか？
乙音　漫画？
八平　なんかほら、男の子がいっぱい出てくるようなやつでさ。
乙音　ああ――。
八平　なんかあん時に珍しく怒ったじゃない？　こんなの読んでちゃダメだみたいな、ちょっと頭ごなしな言い方でさ。それでお前が全部捨てちゃっただろ、あれ？　これでいいんでしょ！みたいな感じでさ。
乙音　そんなに大事じゃないやつだけね。
八平　あ、そう？　全部じゃなかったんだ。
乙音　大事なやつは取っといたから。
千鶴　★どこに隠してたんだろう。
八平　なあ。
乙音　いいじゃん、その話はもう。
八平　あん時にさ、すっごい反省してたんだよ後になって。
乙音　お母さんが？
八平　そうそう。なんていうのかな、まあ、母さんがあんだけ言ったから全部捨てちゃったわけだろ？　確かにこう、言うこと聞いてくれたってことになんのかもしれないんだけどさ、でもホラ、そのあたりはまあ、親も複雑なわけだよ。

千鶴　なにそれ（笑）　ねえ、お父さん、ナイトが話聞くっていってんだけど、
八平　あ、そうなの？
千鶴　うん。あたしと一緒なら聞くって。いい？
八平　度胸ねえな――。まあ、じゃあ呼んで来てよ。
千鶴　うん。じゃあ、ゆーっくり呼んできます。
八平　なんだそりゃ（笑）

千鶴、退場。

間。

八平　だからあれだよ――母さんも反省してたんだよ。意外と乙音が影響受けやすいっていうかさ、そういうとこあるんだなあって。（声をひそめ）ホラ、あれで千鶴なんかは決めたこと絶対曲げないからさ。頑固なとこあっから。
乙音　そうかもね。
八平　サカエはまあ、な。あれはまたちょっと俺たちには理解できないようなとこあるから。
乙音　うん。
八平　多分さ、お前が一番、影響受けやすいって思ってたんじゃないか？
乙音　だから何も言ってくれなかったの？
八平　何もじゃないだろ。
乙音　★何もだよ。自由にやんなさいってそれだけなんだから。
八平　自分で決めろってことだろ、だから。

間。

八平　一緒に帰るか？
乙音　いいよ別に。
八平　――そうか。
乙音　うん。学校あるし。

一拍。

八平　（笑）――ま、俺も実家から逃げてTokyo来たようなとこもあるわけだしな――ようやく向き合う覚悟がついたってことなんじゃない？　ってそれじゃカッコよく言い過ぎか。ホラ、母さんいなくなってからちょっと身体壊したろ？
乙音　うん。
八平　だから田舎帰って環境変えてさ。そしたらまた元気になんじゃないかなあって思ってさ。
乙音　そうなの？
八平　うん。それだなやっぱ一番は。うん。

乙音　まだ良くないんでしょ？
八平　や、もう元気にはなったんだけどさ。
乙音　ウソだよ。
八平　もう二十歳じゃないんだから（笑）
千鶴　お父さん――。

千鶴、ナイト、登場。

八平　おお、やっと来たかナイト。入れお前。
ナイト　うん。
八平　（乙音に）じゃあ今、ナイトと話しちゃうからさ――。
乙音　わかった。

乙音、退場。

◎【一家団欒　その４】　まるで親子　二六年　八月十五日。夕方

八平　で、何をやってる人たちなんだ、あれは？
ナイト　別に――友だち。
八平　友だちはいいんだけどあれは――どういうつもりなんだ？
ナイト　いや、俺には俺の考えがあるからさ。
八平　それじゃ困るんだよ。俺の考えでなんでもやられたんじゃさ。
ナイト　いや、おじさんには確かに迷惑かけたからあん時のことは謝るよ。だけどさ、
八平　★じゃなくて。「ナイト君」の将来のことを言ってんだけどな。
ナイト　わあ、ありがたいねえ！　自分の子供でもないのにそんなに可愛がってもらっちゃって。
八平　そうだよ。感謝しろ、お前も。
ナイト　だから感謝はしてんだろって。
八平　拝め。
ナイト　でも悪いんだけど、俺は俺のやりたいことをやらせてもらうから／拝めってなんだよ。
八平　なんなんだ、俺のやりたいことって？
ナイト　なんだっていいだろ。
八平　なんだっていいのか？　じゃあパン屋さんでもいいんだな？
ナイト　はあ？
八平　いや、近くにいいパン屋さんがあるんだ。ベーカリー遠山って言ってな、
千鶴　★ああ、あそこおいしいよね――。
八平　★そうなんだよ。
ナイト　や、なんだっていいって、そういう意味じゃねえよ。
八平　じゃ、なんだ、やりたいことって？

ナイト　だからなんだっていいだろ。
八平　★なんだっていいならパン屋さんだっていいだろ！
ナイト　★や、そうじゃなくて！
千鶴　★ほんとおいしいとこなのよ。
八平　★ふっくらだ。
ナイト　★や、だから！　あんたは知らなくていいって意味だよ。
八平　ふーん。じゃあ、どなたなら知っていいんだ？
ナイト　え？　だから——俺が知ってりゃいいんだよ。
八平　俺なのか？
ナイト　俺だよ。
八平　（調子を変えて）俺なのか？
ナイト　俺だよ。
八平　（調子を変えて）俺なのか——。
ナイト　なんなんだよ！
八平　そんなこと一生続けられるわけじゃないぞ。
ナイト　はあ？　なんにも言ってねえうちからなんでそうやって決めつけんだよ。すげえカタイ感じでみんな、行政書士の資格とか取りたがってるかもしんねえだろ。
千鶴　ああ、そう？　みんなで行政書士の資格を取るの？
ナイト　と・取らねえけど、たとえばだよ、たとえば。
八平　たとえばなのか？
ナイト　そうだよ。
八平　（調子を変えて）たとえばなのかァ——。
ナイト　お前なん／そろそろ殺すぞてめえ。
八平　そろそろなのかァ？
ナイト　はいー、もー無理ー。話になりませーん。
千鶴　（ナイトに）ダメだよ、そういう言い方したら。

八平、笑っている。一拍。

八平　元気があっていいよ。うちは男が産まれなかったからなあ。
ナイト　はあ？
八平　やあな、俺がわがまま言ってなんとか男の子を、なんつってな。がんばってもらったんだけど、三人目が女で流石に諦めたよ。
千鶴　★あ、そうだったの？
八平　うん。
ナイト　★なんかいいことあんの、男だと？
八平　んー、無いか？　いいこと？

ナイト　ねーだろ普通に。女だったら別にパクられるようなことしなくてもさ、なんだって稼ぐ手段ぐらいあんだろ。
八平　売春か。
ナイト　まあ、だから――そうだよ。
八平　なに引いてるんだか。
ナイト　★うるせえな。売春とかもそうだけどよ、なんかキャバとかホステスとかいろいろあんだろうが。
八平　男じゃダメなのか？
ナイト　ダメだ男は。金になんねー。
八平　ああ――。
千鶴　まあねえ。
八平　なんか長男ってのが一番偉いもんだと思っちゃってたなあ。
ナイト　偉かねえよなんも。
八平　（千鶴に）自分が末っ子だからかなあ。
ナイト　いや、おいおい、末っ子ってうちの親いんじゃねえかよ。あんたの妹。
八平　あいつはだって連れ子だからな。実質俺が末っ子みたいなもんだろ。
ナイト　あれ？　え？
八平　なに？
ナイト　え、そうなの？　連れ子？
八平　そうだよ。ん、知らなかったの？
ナイト　いや、全然――／あれ？　え、じゃあ血のつながりねえってこと？　おじさんと？
八平　当たり前だろ。
ナイト　ええ――。え・マジか。

一拍。

八平　すまなかったな。ショッキングな事実をカジュアルに伝えてしまって。
ナイト　★今更だよ！　あ、そうだったんだ――。
八平　でも、なるほどな。女は金になるな確かに。ウチはあれだ、三姉妹だからすごい効率よかったな？　ある意味？
千鶴　ボロ儲けだね。
八平　おう、ボロ儲けだ。
ナイト　ま、いいとこの娘はいいんじゃねえの？　そんなことしなくて。
八平　いいとこ？　うちが？
ナイト　そりゃ、どっか消えちまってるような親よりよっぽどいいだろ。
八平　まあなあ、静香も生きてんだかどうかもはっきりしないからなあ。
ナイト　そう簡単にくだばるかよあのババアが。ま、くたばってたって関係ねえけど。
八平　そう拗ねるなよ。

ナイト　拗ねてねえよ、別に。
八平　お前だってもう、いいとこの息子なんだからよ。しなくていいんじゃないか、そんなことは？
ナイト　息子ではねえだろ。おじさん。
八平　いや、うちの息子なんだよ。もう。
ナイト　はあ？
八平　戸籍上そうなってんだ。
ナイト　てめ、なに勝手にそんなこと――え？

一拍。

ナイト　マジで言ってんの？
八平　マジだよ。裁判所の人と話してそうなってさ。静香はあれ、「失踪扱い」だから。
ナイト　ああ――。
八平　俺もせっかく身元引受人になんだしよ、と思ってさ。

一拍。

千鶴　ちょっとちょっと、なにこのハートフルな展開。
ナイト　うるせーな！

一拍。

ナイト　え、俺ってホントに戸籍変わってんの？
八平　なに、うれしいの？　拝め。
ナイト　★拝まねえよ！　いや、そういうんじゃねえけど、そうかあ、と思って――。
八平　でも名前は変わんねえんだからさ別に。ホラ離婚して戻ってたろ？　木下から大庭に。
ナイト　まあ、そうだけど――。
八平　そんじゃビールでも飲むか？　なあ？
千鶴　えー、いいのお酒？
八平　いいんだよ、こんな時飲まないでどうすんだよ。（ナイトに）お前も飲むだろ？
ナイト　麦茶でいいよ俺は。
八平　なんだよ、飲めよ少しぐらい。
ナイト　いや俺、下戸だから――。
千鶴　え？　ちょっとでもダメなの？
ナイト　――吐く。
八平　カッコ悪い不良だな。
ナイト　★うるせーな！

八平　そんじゃ麦茶と、な、麦酒持って来てよ。ホラ、麦繋がりで。
千鶴　何言ってんの――。▲あんまり飲みすぎないでよ。
八平　え、お前もつき合えよ。
千鶴　▲今晩はまあ、親子水入らずにしたら？

千鶴、退場。
ナイト、八平、沈黙。
間。

ナイト　俺ちょっと用事あるわ――。
八平　お・おう、おう。それじゃそれ、
ナイト　うんうんうん。

ナイト、退場。

◎【一家団欒　その5　フジとサカエ】　二六年　八月十五日。夕方

大庭家の別の場所。
ケン、ヤッチン、登場。なにやらダンボールの箱を抱えている。

ヤッチン　▽ああ、クソ重めえマジで――。
ケン　▽ちょっ落とすなよ。
ヤッチン　お？　おおっ!?　ダーさんじゃん！
ケン　なに無事なの？
ヤッチン　というか自力で抜けてきたのかよ？　なあ？
ダーさん　――うい。
ケン　マジでか。

フジ、小柳、元木、ナイト、登場。口々にダーさんを呼ぶ。

小柳　うぉー、マジだ、ダーさん！
元木　おーい、どこ行ってたんだよ！
ナイト　なになになに？

よくわからない盛り上がり。

元木　え、なに結局大谷さんだったわけやっぱり？

ダーさん、以下、マイムで会話。

小柳　（ダーさんのマイムを読み）それは――全部――言わない――約束？

ダーさん　（そうそうそう）

ナイト　しゃべれよ、だからって。

ヤッチン　じゃあ意味なくなっちゃいましたね――せっかく運んだのに。

小柳　え、なんなのそれ？

ヤッチン　ん、だから突撃に備えて。いろいろ武器。

元木　え・え？　武器？

ヤッチン　なんかケンさんがどうしても用意しろって言うから。

フジ　あ、へえ――。

ヤッチン　（ケンに）良かったじゃないっすか。大谷さんも気が済んだってことっすよね？

ケン　さあなあ。

ナイト　え・でもあれじゃね？　とりあえず合宿は終わりじゃね？

小柳　あ、ホントだね。

元木　終わりだ合宿！　やった。

フジ　（ナイトに）まあまあ、快適だったな。

ヤッチン　どこがっすか。

ケン　ちょっと車戻すからお前らも手伝って。

ケン、ヤッチン、ダーさん、フジ、ダンボールを持って退場。場面転換。

◆音響：曲in「生還」

【6】　せいかん

【遺言】

◎【千鶴語り　その４　生還】　二六年　八月十五日

千鶴　その日の夜は、みんなで一緒に麦酒（ビール）と麦茶を飲んで、たのしいたのしい一晩を過ごしました。翌日にはみなさんもここを出て行くっていうんで、乙音もサカエも、開放感というか、達成感というか、そういうスカッとした気分に浸っていて――。あたしがピアノなんかを弾いたりして、フジ君がそれにギターで合わせたりなんかして――。ケンちゃんさんだけはむっつり黙っていたんですけど、それでも、時折は笑顔なんかを見せたりもして――。９階の窓から見えるいつもの夜景も、その日はなんだか違って見えるみたいで、忘れようとしても忘れられない、すばらしい夜になりました。

※千鶴以外の俳優の動きがある。右の台詞終わりと合わせて止まる。

◇音響：曲out「生還」

千鶴　翌日。うちのマンションの非常階段の鉄のアーチに、ぷらーんと、てるてる坊主みたいにして、ナイトがぶら下がっていました。

◎【ナイトの遺書】　二六年　八月十六日

ナイト　姉ちゃん。もうダメだ。俺はあれだ。無理だ。――今までいろんなことをやってきたけどさ、それって結局、なんとか周りに合わせようとしてただけなのかもしれない。人の顔色ばっか伺って。そういう自分がすっごいもう、大っ嫌いだったんだ。だからなるべく気を遣わないで済むようなやつとつるむようにして。でも、結局そいつらの空気を乱すこともやっぱり俺にはできなくって。そう、だから、いつも結局は自分が無いんだよ、俺は。

サカエ　それがなんなの？
ナイト　だからもうダメなんだ。
サカエ　ダメってなに、だから。
ナイト　生きていくことができない。ていうより、そんなに生きていたいと思ってないんだ。
サカエ　じゃあ、死ぬの？
ナイト　うん。生きるだけの理由が見つからない。

間。

サカエ　止めないよ、別に。絶対止めない。
ナイト　わかってるよ。
サカエ　あんたのお母さんじゃないんだから。
ナイト　その話はいいじゃん、別に。
サカエ　あたしが冗談半分のリスカをするたんびにさ、お母さんは自分が死んじゃうんじゃないかってぐらい泣いてくれたよ。だからあたしは、せめてあの人が死ぬまでは生きていてあげようって思うことができた。
ナイト　悪いんだけどそういうのは俺にはわかんねえんだ。わかるわけねえだろ？　血の繋がった家族なんか誰もいねえんだからさ。

乙音　だからってウチではやんないでよね。
ナイト　は？　ウチで――？
乙音　死ぬんでしょう？　なに？　首でも吊るの？
ナイト　うーん。いや、でもあれってさ、たまーに生き延びちゃう人とかいるからね、それもどうなのかなあって。
乙音　それはヘタなんだよ、やり方が。上手にやんな。
ナイト　でもなんか、ブラーンてするし。
乙音　なんなの？　ウチらへのあてつけ？
ナイト　そんなんじゃないけど別に――。
乙音　じゃ、なに？
ナイト　無いんだよ、力が。
乙音　力？
ナイト　生きていくための、なんていうか意欲っていうかさ。意思っていうかさ。
乙音　魂（ソウル）、じゃなかったの？
ナイト　まあ、そういうもの。そういうものが無いんだ。

一拍。

ナイト　――みんなあれはさ、魂（ソウル）ないのわかってて言ってんだよ。超魂（ウルトラソウル）込めろなんつって。なんか、そんなことといってっと自分たちにも魂（ソウル）あんのかなあ、みたいな？　アガるじゃん？
乙音　「じゃん」て言われてもわかんないけど、あたしは。
ナイト　うん、だよね。そりゃあ。

一拍。

ナイト　俺はあれだよ、思い出が無いんだよ。

一拍。

ナイト　みんなは多分、ホントに楽しい時に楽しい顔をして、つまんない時にはつまんない顔をして？　そうやって生活してるからさ。ちゃんとなんていうか、ひとつひとつが思い出になっていくと思うんだよ。でも俺は違う。――いっつも周りに合わせて。どんなことといったら一番その場が丸く収まるかっていうか、そんなことばっか考えてて。そうそう。俺がいるとみんなが揉め事起こさすに？　なんかうまくいってんじゃん！　ナイトのおかげじゃーん！　みたいなさ、いや、別にそんなこと言われなくったっていいんだけど・でもさ、――みんながどっかでそう思ってくれてたら――最高じゃん。とか、さ。そういうことをいっつも考えてて。

乙音　へーそー。

ナイト　俺がいて、うまくいってたじゃーん！　みたいな、そういう感じにしたかったんだよ。多分。わかんないけど。本当はみんなだってそんなもんなのかもしれないけどさ。でも、そういうことばっか考えてて。それが嫌で。

間。

ナイト　ああ、あの時は本当に楽しかったなあ、とかさ、そういうのが無いんだ。いつも気ィ遣ってた。それだけなんだよ。なに思い出しても、気ィ遣ってたなあ、って。はい、おしまい。そういう感じだよ、俺の人生は。ぜんぶ透明。スケスケに透き通ってるよ。

一拍。

ナイト　そういうのはやめたいと思った。真剣に。でも、わからないんだ。ずっとそうやって生きてきちゃったからさ、何をどうすれば、ってそういう方法っていうかさ、手段っていうかさ。――誰がなんといおうと俺はこうだ、みたいなそういうことを思える人が、すっげえなー！　って思うんだけどさ、でも、よくわからないんだ。

一拍。

ナイト　だから誰かに怒ることもできない。「卑怯だ！」とかね。「カッコ悪イ」とかね。そういうのだって全部、自分一人じゃ決められないんだ。

一拍。

ナイト　いいきっかけだよ。ダーさんが帰ってきてくれて、よくわかんねえけどなんか、うまくいってんじゃん！　ナイトのおかげじゃーん！　みたいになっててさ。そう、だから今しかないんだよ。

フジ　お前、ホンキでキレたことってあんの？
ナイト　ない、かなあ。あんまり。
フジ　だろうな。そう見えるよ。
ナイト　（笑）そうなんだよ、はい。あたりィ――なんつって。

ナイト　みんなどうやってそういう、感情みたいなものを学習したんだろうね？　多分さ、誰かに教わったりするものじゃないんでしょ？　みんな元々できることなんだろうね。俺はそういうのがよくわかんなくって。

ケン　その愛想笑いもやめろよ。
ヤッチン　なんか弱っちい感じしますね。
ナイト　はは、そうだね、ごめん。
ケン　だからヘラヘラしてんじゃねえって。ムカつかれるぞ。
ナイト　うん。わかってるよ。――わかってる。わかってるよ！

ナイト　本当に怒ったり、笑ったりしたらもっとなんか、俺にも思い出がたくさんあったのかもしれないね。
大谷　自分の思い出みたくして語ってんじゃねえよ。
ナイト　え？
大谷　お前は実際にやったわけ？　本当に公園で花火をやったわけ？
ナイト　いや、え？　やった――やったと思います。
大谷　違うよ。Ｓのカンパニーを幼馴染で固めるわけねえだろ？　お前は、カンパニーで出会った連中を幼馴染だと思いたかったんだ。
ナイト　俺の記憶に残っているんだから、ちゃんと、俺の思い出なんじゃないの？
大谷　お前の話じゃないんだろ？　なあ！
ナイト　違う――？　違うのか――。

一拍。

ナイト　はい。違いました。俺の話じゃありません。
大谷　ホラ、そうやってすぐに見失う。
ナイト　え？　何が？
大谷　お前の話だろ!?
千鶴　呆れましたね。

ナイト　★姉ちゃん！

■□音響：電話の発信音。

母　はい、もしもし？
ナイト　ああ、浩二クンのお母さん？　俺――俺あの――加藤ってもんだけど。
母　ああ、あなたね――。
ナイト　うん。俺――なんだ。
母　珍しいじゃない？　こないだ電話してきたばっかりなのに？
ナイト　あれ？　ああ――。うん、こないだはその、なんだ――いろいろ酷いことばっか言っちゃったなあ、と思ってさ。
母　いいのよ。
ナイト　うん。そう。そっか――。
母　あのあとちゃんと浩二に電話してねえ。ちゃんとあの子は無事だってわかったから。まあ、お金は渡しちゃったあとだけどね（笑）
ナイト　ああ、そう。それは――でも、良かったねえ、無事で。
母　ええ。無事でよかった。「なんで自分の息子を信用しないんだー」って逆に怒られちゃったわよ（笑）
ナイト　ああ、そうなんだ。◆うん、でも、元気で、なによりだったよね。

◆音響：曲in「人形」

母　そうねえ。
ナイト　うん。（泣く）ごめん――なさい――俺――ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
母　いいのよもう。泣かないで、わかったから。
ナイト　うん、うん。
母　あなたみたいな人が自分の息子じゃなくって、本当にね。なによりだったわ。

■音響：効果音。通話終了音。

ナイト　ふっざけんじゃねえぞ、クソババア！　あああああああ！

◇音響：曲out「人形」

ナイト、静かになって立ち上がる。

ナイト　もういいや。もう何も悲しくない。虚しくもない。何もない。何もないよ。言いたいことも、やりたいことも何もない。ただ、あなたと一緒にいたい、なんて人がいるわけもない。誰とも一緒にいなくていい。こんな仕事なんかクソ喰らえだ。何もやりたくない、ていうわずかな

意思すらもない。カエルの卵みてえな半分腐った目だけをくっつけて、ただ、ここに置かれているだけの人形が、この俺だよ。

一拍。

ナイト　（千鶴に）姉ちゃん、俺は大庭ナイトなんかじゃない。木下。俺は、木下直人です。

ナイトの死を暗示する何かが舞台上で起きる。※ナイト、車椅子に乗る。

八平、登場。

八平　なにやってんだ、そんなとこで。――ナイト！

※以後、ナイトは終演までそこに居続ける。

二人目の男、登場。

二人目の男　はいっ！　ナイトくんの出番はここまでーす！　いやいやいやいやいや――。どうでした？　実際やってみて？

一人目の男　なかなか、やりがいのある役というか、

二人目の男　★うるせーよ。はい、ではこの役をやるにあたって苦労した点は？

一人目の男　苦労した点？　んー、やっぱり――お金のために？　犯罪をしなきゃいけない、とか。そういうのはあんまり――。まあ、想像はできるんですけどね、ああ、まあ、いましたし、劇団にも昔あのー、逮捕されちゃった人とか、俺が入る前ですけど。

二人目の男　ああ、役者で？

一人目の男　はい。なんかガチでいたみたいなんですけど――（客席に）いや、これはホントに。

二人目の男　はいはい。

一人目の男　ま、だから、想像して。はい。がんばって。そういう立場になったんだあ、っていう風に思って。やりました。はい。

二人目の男　ありがとうございました、〇〇・〇〇クン（俳優の実名）でしたーっ！

一人目の男、二人目の男に倒され、車椅子に乗る。

以後、一人目の男は終演までそこに居続ける。

◎【シンパシーの強度】　二十六年　八月十六日

大庭家近くの公園。ケン、フジ、ヤッチン、元木、ダーさん、小柳がいる。

■音響：効果音　セミの声。

ダーさん　なんか――俺が悪いのかな。俺がなんか、勝手にナイトさん家にきちゃったから。
元木　関係ねえだろ。
ダーさん　そうだけど、でも、
ケン　自殺するやつになんか俺は同情しない。死ぬんなら、勝手に死ね。
フジ　いま言うことかよ――。
ケン　うん、言えるよ。
フジ　状況考えろよ。
ケン　だって俺は両親自殺してるし。
フジ　あ、そう、なんだ。
ケン　うん。だから俺は自殺するやつなんかに絶対同情しない。勝手に死ねばいいと思ってる。

間。

ケン　（笑）ウソだよ。――元気だよ、両親。田舎でタバコの葉っぱ作ってるよ。
フジ　お前さ／
ケン　★だからって！　――理屈は変わらねえだろ。俺の両親が自殺してたら黙っちまうような理屈なら、そんなもん理屈じゃねえよ。

一拍。

ケン　どんだけゆるぎねえもん見つけられんのか？　それが勝負だろ。

場面転換。

◎【千鶴語り　その5　戦闘】

千鶴　非常階段の鉄のアーチに、ぷらーんと直人がぶら下がっていた日の夕暮れ。私は家を飛び出した。もう一度、また再び。

一拍。

千鶴　なんとも格好のつかないことに、てるてる坊主が息を吹き返してしまったから。「峠を越えました！」なんて、なんの冗談なんだか。早ければ今すぐに。どうにかもって、数日間。「峠を越えそびれました」の間違いじゃなかろうかと。

一拍。

千鶴　戦闘、開始。こんな言葉が自分にフィットする日が来るなんて夢にも思わなかったけれど、今は確かに、戦闘、開始。大谷さんに会いに行く。なんのためなのかはわからないけれど、会いに行く。

【夕暮　Ⅱ】

◎【儀式　その2／最終報告】　二十六年　八月十六日

◆音響:曲in「儀式」

ケン　そんじゃ、はい。今から［儀式］を始めまーす。

全員　うぇーい。

ケン　はい、まず、みんな丸くなって手ェつなぐ。

全員、座って円を作り、手をつなぐ。

ケン　ハイハイ。そしたらこっからは絶対しゃべんないで聞いてほしいんだけど、――今から、一人づつ、大切な人が死んだ時の話をしていきます。

元木　えー。

ケン　自分にとって本当にお別れしたくなかった人？　出来ればもう一回だけでも会いたいな、とかそういう人の話をしてくのね。

ヤッチン　なに、それはどういう状態の人でもいいの？

ケン　★しゃべんなっってんだろ！

一拍。

ケン　そんじゃ始めっか――ああ、みんな一回深呼吸しよっか？

甘粕　最終報告。ゼロ年代から急速に発展を遂げた組織型詐欺犯罪は、一時的にその被害額を減少させたとはいえ、今や被害届の出ているものだけでも年間四百億円以上、実態は五百億円を越える被害が出ていると予想される。もはやそれは、ひとつの経済領域とも呼ぶべきものだろう。結果として、消費行動の盛んな若者層に個人資産の移動が起こっていることは、マクロ経済的には必ずしもマイナス要因とは断言できないものがある。

フジ　誰だろうな。もう一度会いたい人――ナイトかなあ、ナイトかあ？　みたいな？（笑）

他のメンバーも苦笑。

甘粕　これら犯罪結社の持つ大きな特徴は徹底した分断・分離構造である。実際に電話をかけるプレイヤーと呼ばれる人間たちは現場を取り仕切る番頭格より上の人間と顔を合わせることはない。すべては何重にも遮断されている。彼らの間には、旧来の犯罪組織に見られるような家族的繋がりが一切ない。

元木　やっぱ母ちゃんかな――。まあ、どうしようもないやつだったんすけど。あのほら、みんなセンスある人アゲるじゃないっすか？　「考えるな、感じろ！」みたいな人好きでしょ？　ウソつけって。じゃあセンスだけで生きてて、「この男最高！」とかいって、自分をシャブ中にしてぶん殴りまくるような男を選んでくるようなそういうセンス？　そういうバカはどうしたらいいんすかね？　（笑）ウチの母ちゃんっすよまさに。

甘粕　犯人たちの中には生育環境に問題を抱えているものも多く存在し、教育の不足や貧困によってそれらの犯罪に走るものも多い。したがってこれらの犯罪は彼らにとって、拡大しづつける格差を解消するための最も現実的な手段、あるいは、彼ら自身によるサバイバルのための戦略としてこれを位置づけることができる。

小柳　親だよね、やっぱ。ちゃんとした親は自分の子供かわいがりたいじゃん。教育とかもちゃんとやるし、どんどん差がついてくんだよ。

フジ　会いたい人について話すんじゃなかったのかよ？

元木　どうせ競争だっつうなら、スタートラインを同じにしてほしいよね。てかなんかしたのかよ赤ちゃんの頃のナイトさんが？

ヤッチン　まあ、いいんだよ。どんだけ努力したって、だんだんだん下がっていってさ、どん底までいって、そっからさらに穴掘って下がっていって――。どうしようもなくなった時にはまあ、死ぬんすから。

甘粕　もちろん、犯罪者は厳しく処罰するべきである。しかし一方で、タンス預金が三十兆円越える我が国において、いかに埋蔵された個人資産を市場に乗せていくかは喫緊の課題であり、ある意味で彼らの「ビジネス」は短期的にとは言え、一定の効果を持ったものといえる。結論として私は、――もうしばらくの間、彼らをやんわり放置するのも手ではないか、と考えている。少なくとも、おかわいそうねといいながら彼らを根絶やしにするだけでは、何の問題も解決されることはない。

小柳　そりゃみんなちゃんとした親欲しいよ。施設の子だって親と離れたくないよ。当たり前じゃん。「じゃあ手に入るんですか？」って。諦めてんだからさ、みんな。同情するんならそこまでつきあってやってくれよ。つきあいきれねえんだったらもう、平等ごっこやめてくれよ。日本は身分がないから幸せじゃん、とか？　身分あるよバカ。てめえが貴族だからわかんねえだけだよ。

ケン　ところでさ、「すばらしいこの世界に」なんてよく言うけど、――どうして世界が「すばらしく」なんかなくちゃいけないの？　現に、このように、大してすばらしくないじゃない？

小柳　それでも感謝しているよ、あたしは。世界と、お母さんと、世界に。

乙音　赤いアジサイなんてあったっけ？

小柳　人に言われて、なんだか少し、花を見たような気がしていただけ。

乙音　本当の思い出なんてあったっけ？

小柳　いつか、とか、あのころ、なんていう時間が、自分にもあったような気がしていただけ。

◇音響：曲out「儀式」

◎【走れ、メロスじゃない誰か】　二十六年　八月十六日。夕方

千鶴　必要っていいましたよね、大谷さん。

大谷　なに、急に？

千鶴　ナイトがここに必要だって。必要とされることが大切だって、そういいましたよね？

大谷　まあ、言ったかもね、そんなこと。

千鶴　ナイトにいま、大谷さんが必要なんです。すみません、嘘です！　あたしに。あたしに必要なんです。大谷さんが。

間。

大谷　どういうこと？

千鶴　ナイトが首を吊りました。

大谷　へえ、そう――。死んだの。

千鶴　まだ生きてます。もう、そんなには長くはないみたいですけど。

大谷　――それで？

千鶴　それだけです。大谷さんには知っててもらいたかったから。

大谷　え、それだけ？　なの？

千鶴　いや、会いにきてもらたい。私が。きっとナイトも。

大谷　――なんのために？

千鶴　私は、あなたと一緒にいました。ナイトは、あなたと一緒にいました。だから。

大谷　――意識はあんの？

千鶴　ありません。

大谷　じゃわかんねえじゃん？　会いに行ったって？

千鶴　絶対にわかりません。

大谷　はあ？　それじゃあ意味ねえじゃん／

千鶴　それでも、来てください。
大谷　なんでだよ。奇跡でも起こせっていうわけ？　俺に？
千鶴　奇跡なんか起きません、絶対に。もう起きた後だから。――ナイトがいて、生きて、バカやって。あたしがいて、生きて、バカやって、そんで大谷さんていうとんでもないバカと出会って。それが奇跡です。
大谷　へー。あ、そう。

間。

千鶴　来るんですか？　来ないんですか？
大谷　んん――。
千鶴　いいから来いよ！　ここで来なかったらあんたタダのバカだ。感動をくれない、タダのバカだ！

やがて大谷、立ち上がる。

◆◇音響:曲in「ダンス」

◆◇音響:曲in「カーテンコール」

幕

【参考文献】

【哲学・倫理】

これからの「正義」の話をしよう。　マイケル・サンデル
自由とは何か　大屋雅裕
自由とは何か　佐伯啓思
自由はどこまで可能か　リバタリアニズム入門　森村進
なぜ悪いことをしてはいけないのか　大庭健　安彦一恵　永井均
国家民営化論　笠井潔
人間にとって法とは何か？　橋爪大三郎
日本の思想　丸山眞男
これがニーチェだ　永井均
ニーチェ入門　竹田青嗣
悪について　中島義道
隷属への道　F・A・ハイエク
ケインズとハイエク　松原隆一郎
ハイエク　知識社会の自由主義　池田信夫
自由をいかに守るか　ハイエクを読み直す　渡部昇一

【批評・心理・社会】

ゼロ年代の想像力　宇野常寛
嗤う日本の「ナショナリズム」　北田暁大
日本の難点　宮台真司
無能力批評　―労働と生存のエチカ―　杉田俊介
フリーターにとって「自由」とは何か？　杉田俊介
リトル・ピープルの時代　宇野常寛
自由を考える［9・11以降の現代思想］　東浩紀・大澤真幸
東京から考える　格差・郊外・ナショナリズム　東浩紀・北田暁大
思想地図vol.3 アーキテクチャ　東浩紀・北田暁大　他
カーニヴァル化する社会　鈴木謙介
〈対話〉のない社会　中島義道
新世紀神曲　大澤信亮
思考実験　岡本裕一郎
だましの手口　知らないと損する心の法則　西田公昭

【ノンフィクション】

職業“振り込め詐欺”　ＮＨＫスペシャル「職業“詐欺”」取材班
振り込め犯罪結社　200億円詐欺市場に生きる人々　鈴木大介
★家のない少年たち　親に望まれなかった少年の容赦なきサバイバル　鈴木大介
家のない少女たち　家出少女18人の壮絶な性と生　鈴木大介

援デリの少女たち　鈴木大介
秋葉原事件　中島岳志
解　加藤智大
消された一家 ―北九州・連続監禁殺人事件　豊田正義
名前のない女たち（一連のシリーズ）　中島敦彦
職業としてのＡＶ女優　中島敦彦
裸心 ―なぜ彼女たちはＡＶ女優という生き方を選んだのか？―　黒羽幸宏
独立国家のつくりかた　坂口恭平
セックスボランティア　河合香織
心からのごめんなさい へ―一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦―　品川裕香

【フィクション】
『斜陽』　太宰治
『桜の園』　アントン・チェーホフ